



香道秘伝書校正 全(下巻)

大枝流芳校正

炭翁齋香爐之図

香爐の事、御尋ねにより、志野入道相伝の旨
存じ出し次第記し進じ候。定めて失念どもこれ有るべく
候間、なお御不審承に於いては申し入るべし。御事
おおく候間、先ず大方に申し候なり。左のごとし。

元龜四年

炭翁齋宗入

二重香爐 灰五合



〔図〕

二重香爐 灰五合

神前に置く物なり。沈を造り此れのごとく置く。

ほや香爐 灰五合
日月を拝する時、香を焼（た）く物なり。

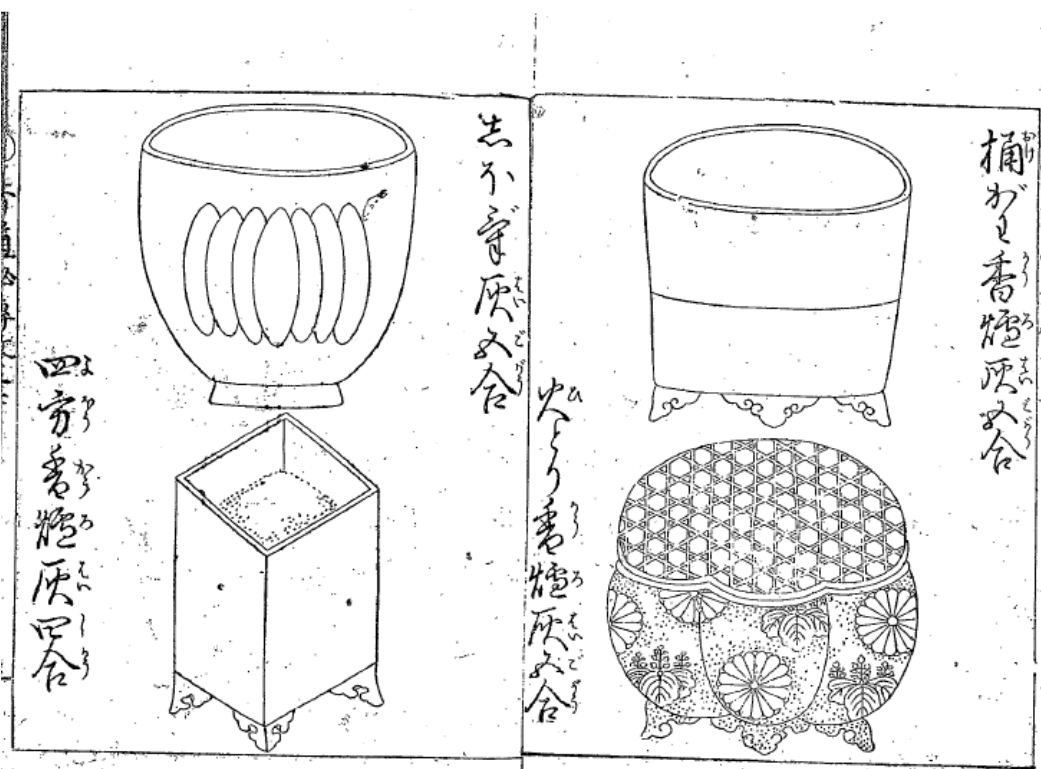
〔上図〕

〔下図〕



聞香爐 灰五合

聞香爐 灰五合



桶がわ香爐 灰五合

火とり香爐 灰五合

四方香爐 灰四合

桶がわ香爐 灰五合
[上図]

しほげ 灰五合

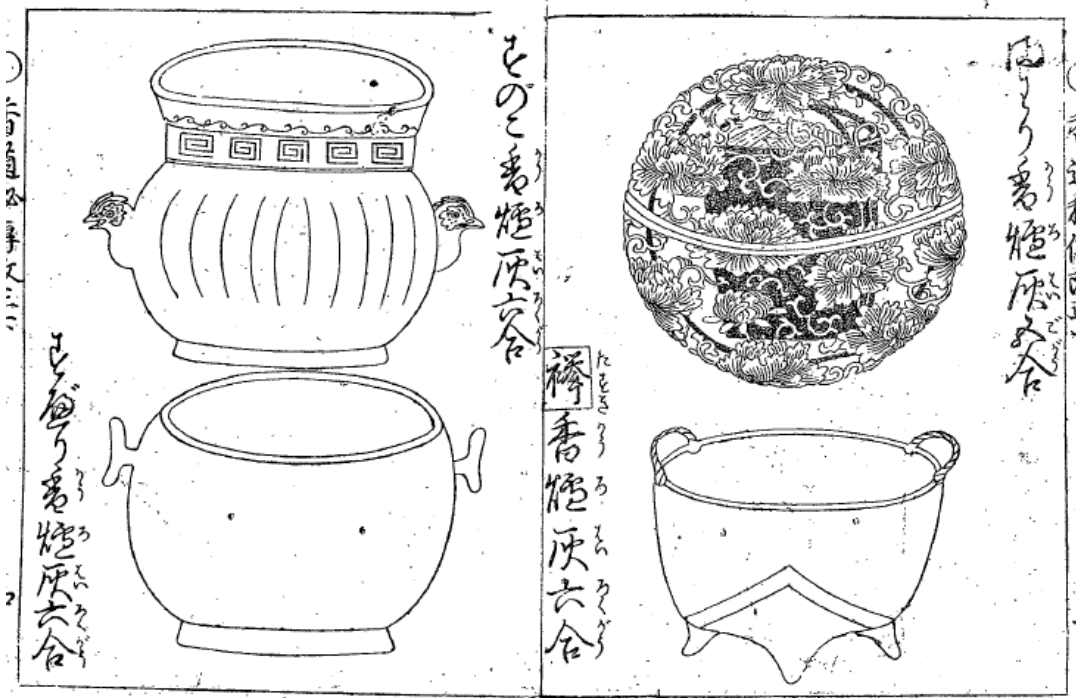
[上図]

[下図]

火とり香爐 灰五合

[下図]

四方香爐(よほうごうろ) 灰四合



まわり香爐 灰五合

〔上図〕

すのこ香爐 灰六合

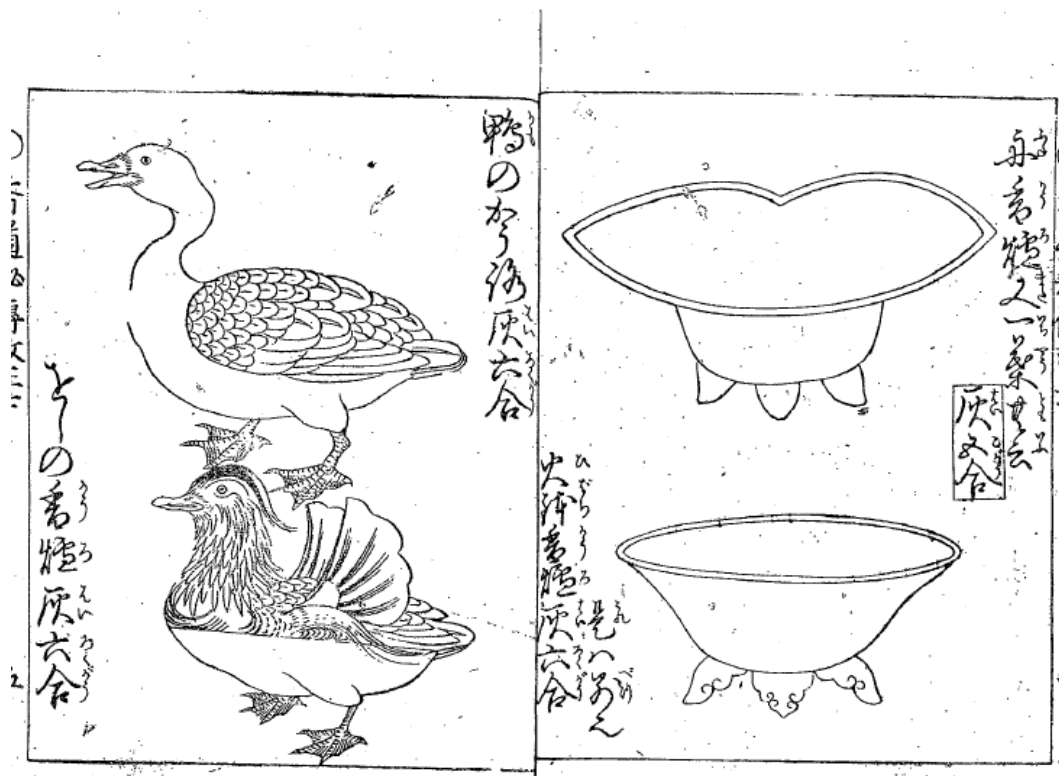
〔上図〕

〔下図〕

禪香 (たすきこうろ) 灰六合

〔下図〕

すべり香爐 灰六合



舟香爐 また、一葉(いちよう)香爐とも云う

灰五合

〔上図〕

〔下図〕

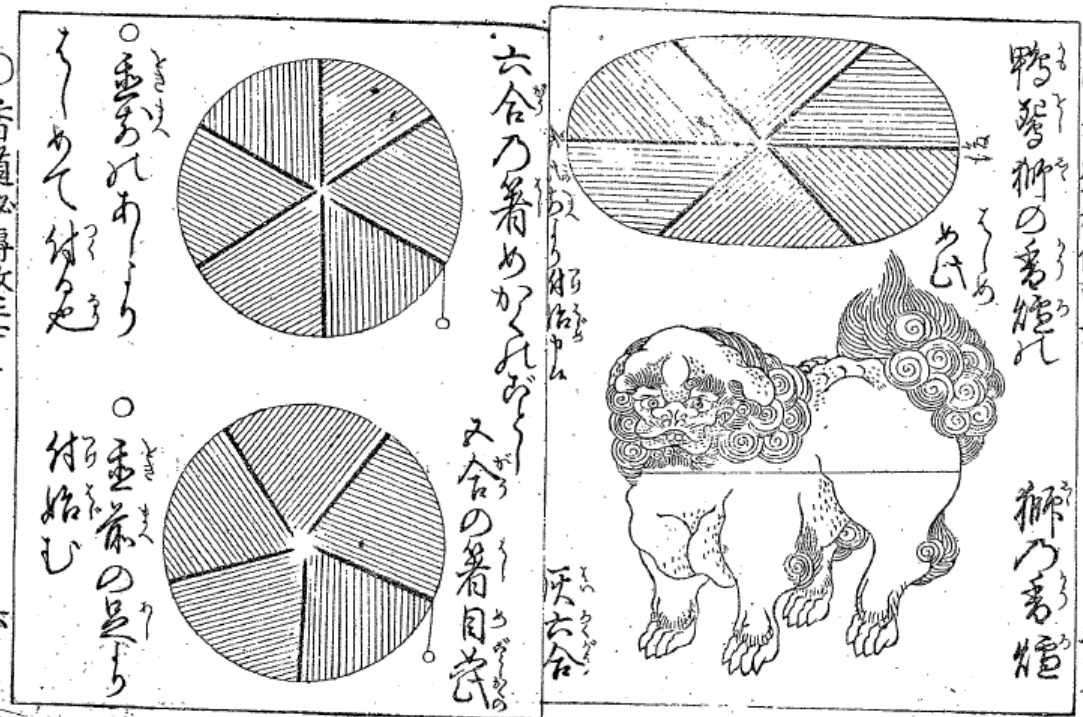
火鉢香爐 灰六合 (舟香爐と区別)
これは別なり。

鴨のかうろ(香爐) 灰六合

〔上図〕

〔下図〕

をし(鴛)の香爐 灰六合



鴨、鴛、獅の香爐の
はしめ(箸目)
かくのごとし。

〔上図〕

前この前より付け始め申し候

六合の箸目かくのごとし。

〔上図〕

○置き前のあしより
はじめて付くるなり。

〔下図〕

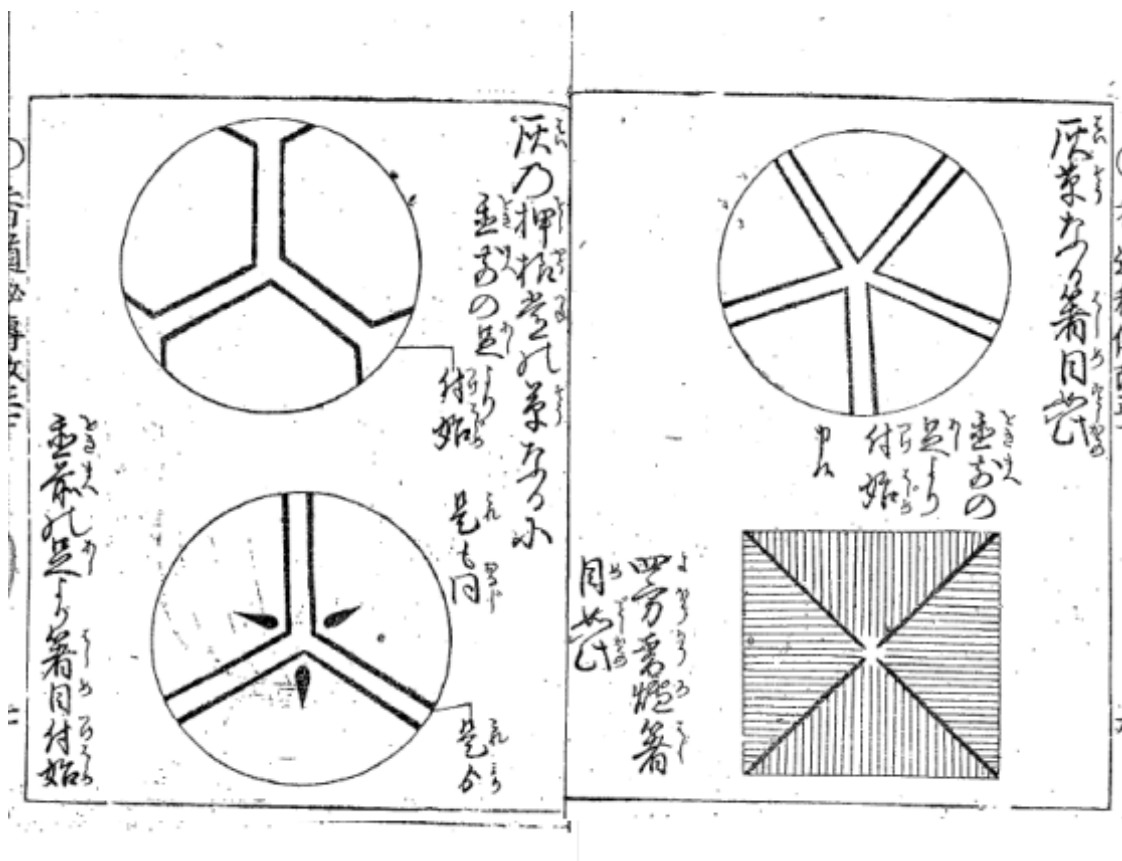
獅の香爐

灰六合

五合の箸目かくのごとし。

〔下図〕

○置き前の足より
付け始む。



灰、草なる箸目かくのごとし。

〔上図〕

置き前の
足より付け始
申し候。

〔下図〕

四方香爐箸
目かくのごとし。

灰の押し様、常の草なるに

置き前の足より

← 付け始め

〔上図〕

これも同じ

〔下図〕

← これより

置き前の足より箸目付け始め



二重香爐

灰六合

〔図〕

ほり物の盆饅には、

花さき絵の方へ向かうなり。

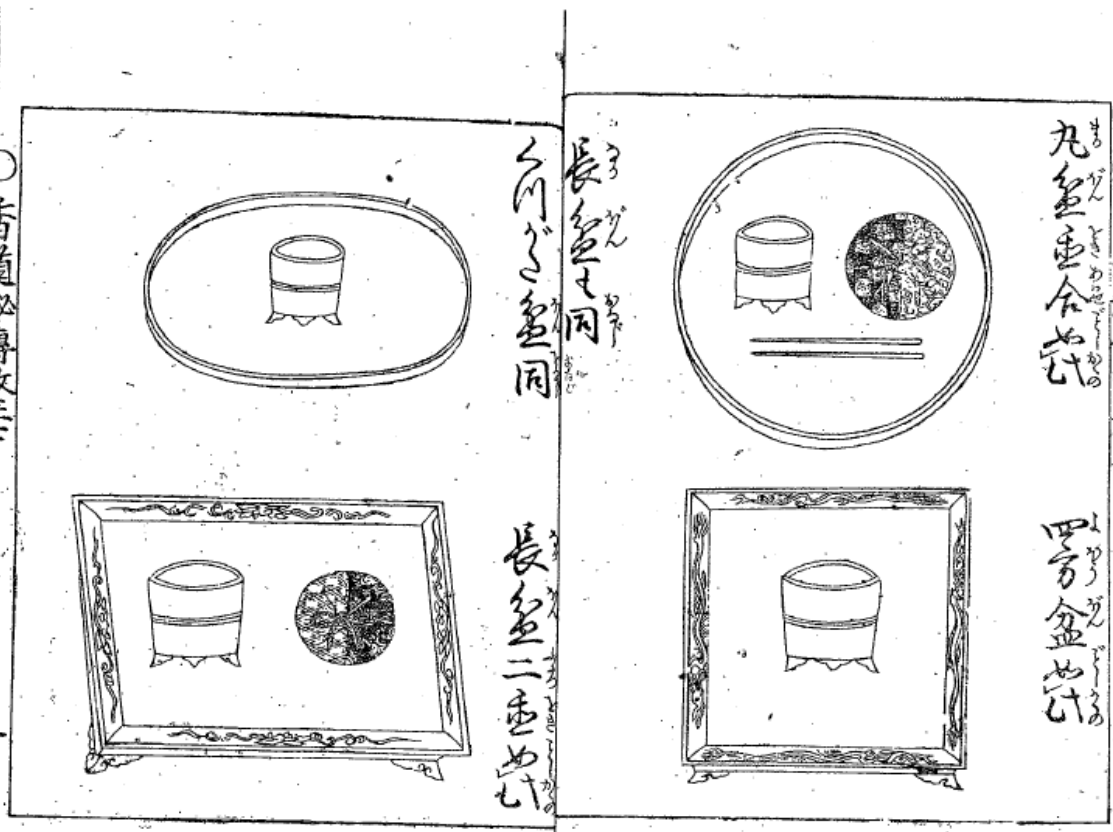
人前に出す時は、花の本（もと）を

向かうなり。

〔上図〕

〔下図〕

丸盆に置く時は、
袋の緒のあまり、
この通りなり。



〔上図〕

丸盆置き合わせかくのごとし。

長盆も同じ

くつがた盆同じ

〔上図〕

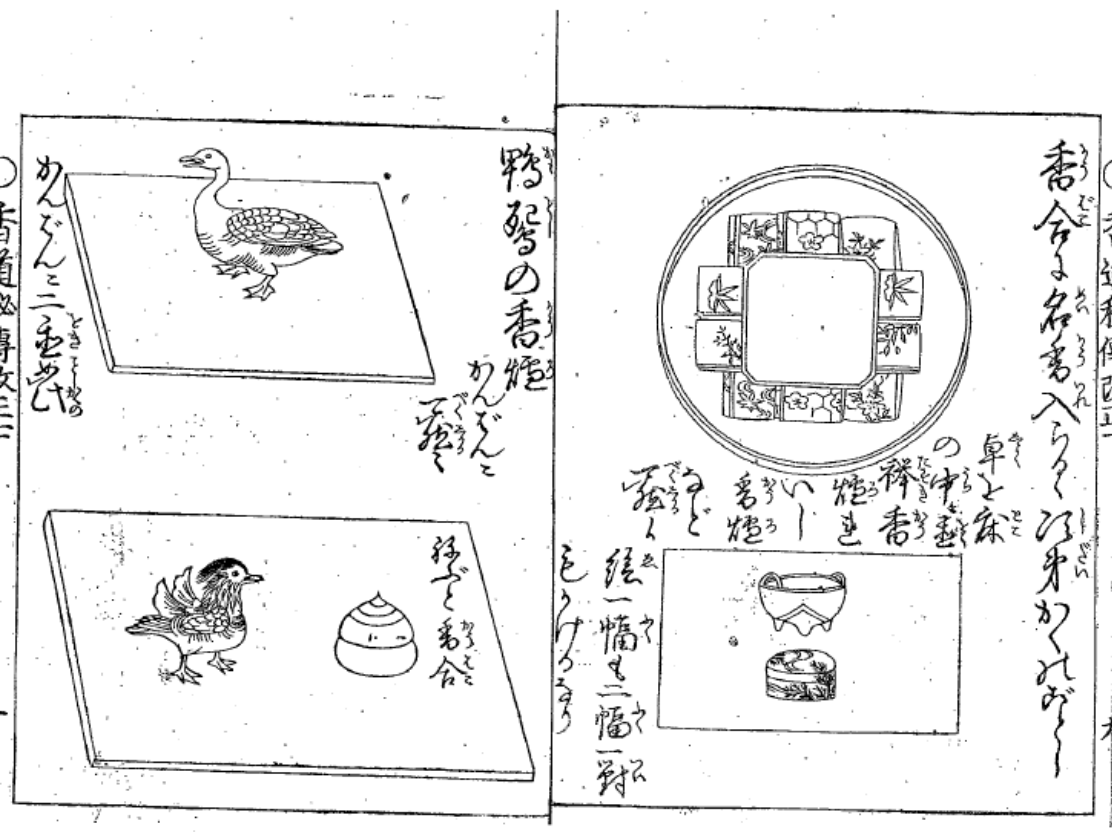
〔下図〕

四方盆かくのごとし。

〔下図〕

長盆二つ置きかくのごとし。

〔下図〕



香合(こうばん)に名香入れらるる次第、かくのごとし。

〔上図〕

卓を床の中に置き、
襷香爐、れ
いし
香爐
など
然るべく候。

〔下図〕

絵一幅も二幅一對
もかけるなり。

鴨、駕の香爐

かんばんに

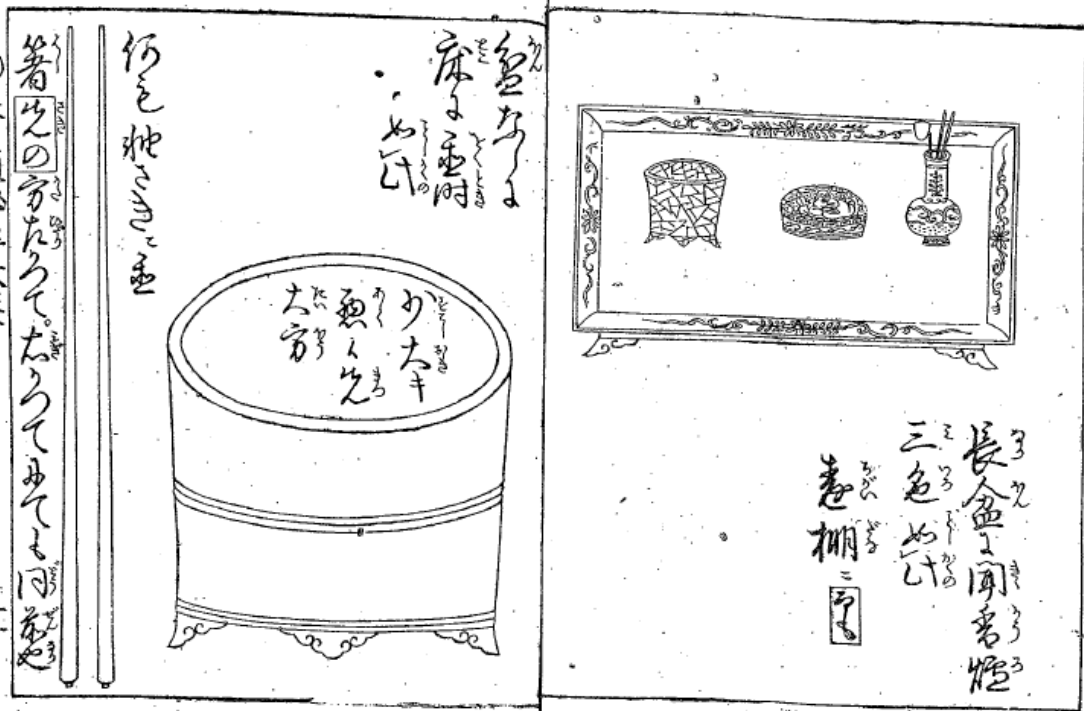
然るべく候。

〔上図〕

ねぶと香合

〔下図〕

かんばんに二つ置きかくのごとし。



〔図〕

長盆に聞香爐、
三色、かくのごとし。

違棚（ちがいだな）にてても。

盆なしに
床に置く時、
かくのごとし。

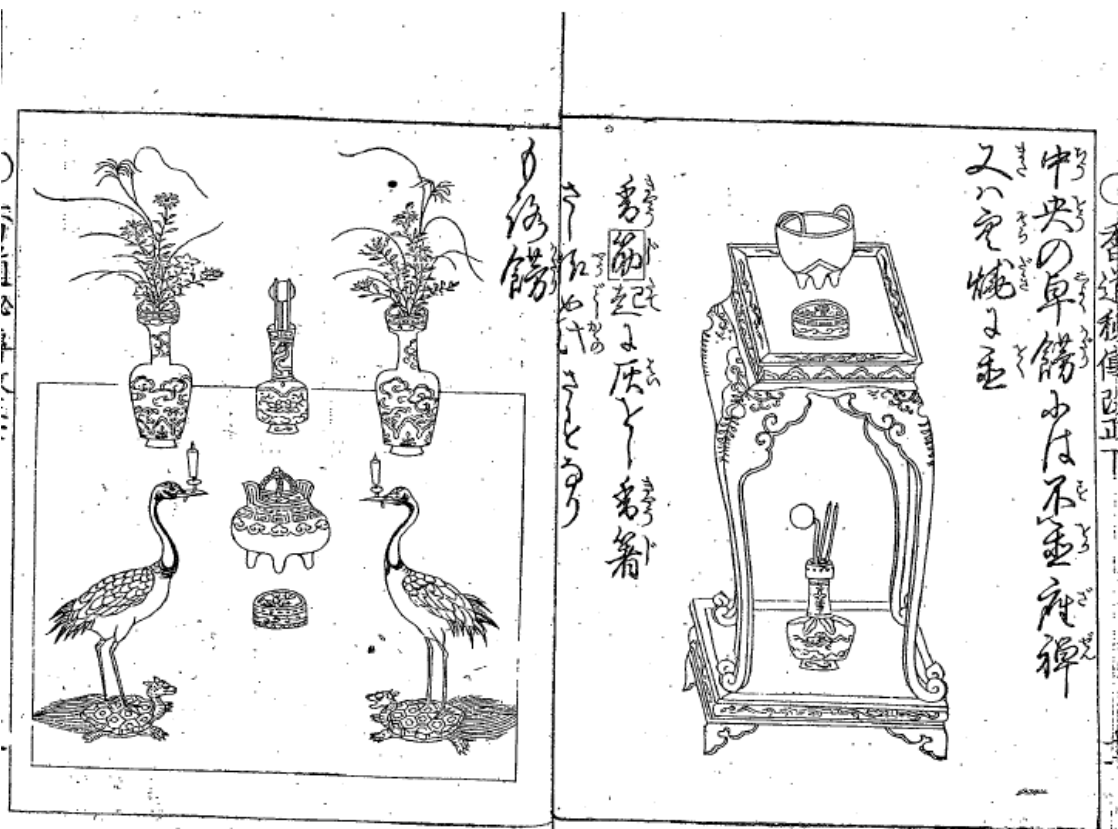
〔図〕

少し大き
悪しく候。先ず
大方。

何れも軸さきに置く。

〔図〕

箸先の方、左かつて（勝手）。右かつてにても同前なり。



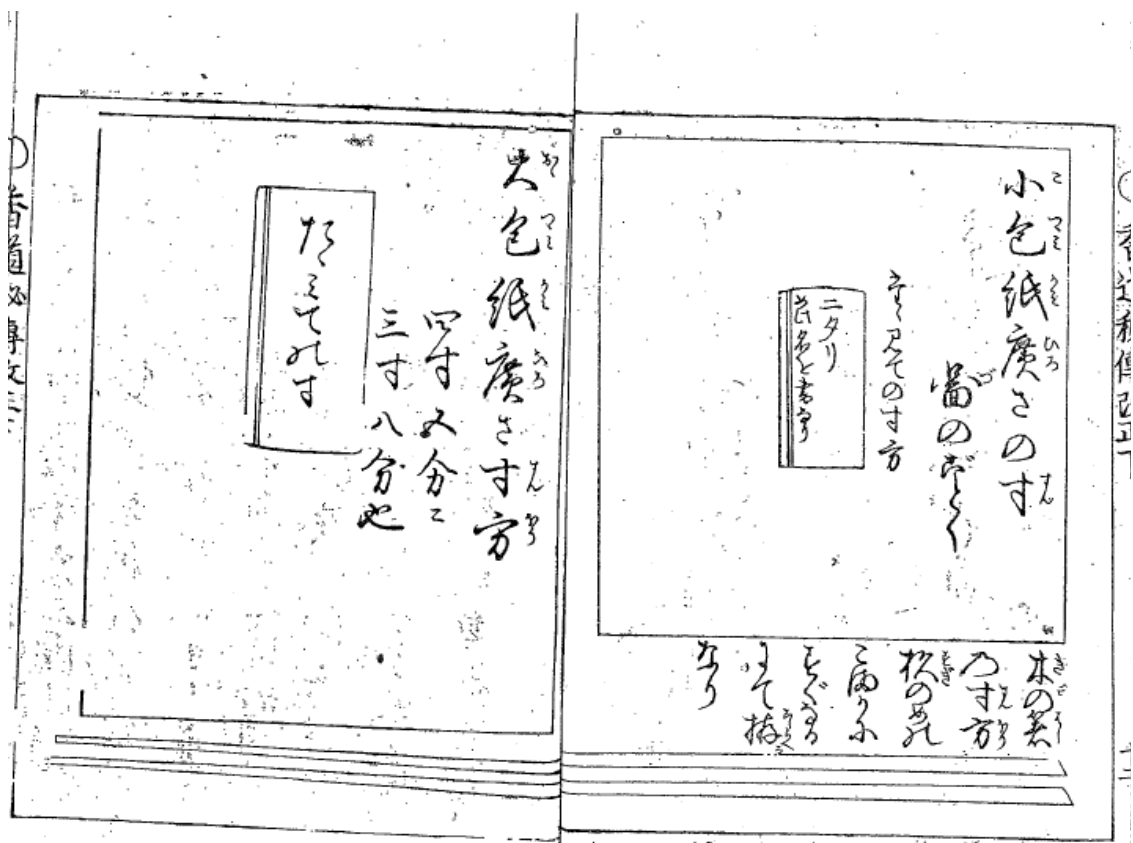
中央の卓鉢には置かず。座禪、
または空焼に置く。

〔図〕

香筋起(きようじたて)に灰おし(押)、香箸(筋)
さし様かくのごとくさすなり。

もろ鉢

〔図〕



小包紙廣さの寸法、
図のごとく。

たたみでの寸法

〔図〕（実寸大）

〔二タリ〕

このごとく名を書くなり。

大包紙廣さ寸法

四寸五分に

三寸八分なり。

〔図〕（実寸大）

たたみでの寸

木の箸の寸法、
おのめのこまかに
すぐ（直）なるにて
拵うなり。

〔下図〕

夫聞香之明德古往今來三國俱以卿
慕焉或却嫌惡而來神仙或瘡沉
痾而生娛樂至于勝計取罪量口
說六珠價直百千兩金也建於隆勝
公嘗傳受異法誠使獲聞香體
聖妙而辨產去林縣的芬芳淺
深時人竊以假名詰則忽別真偽
乎百發百中而已

于時天正第三乙未仲秋吉辰

洛下翠竹庵道三筆之

隆勝入道殿

それ、香を聞くの明德、古往、今來、三國ともに以つて卿

慕（きようぼう）す。或いは、穢惡を却（しりぞけ）て、神仙を來たし、

或いは、沈

痾（じんあ）を瘡（い）やして、娛樂を生ず。勝て（あげて）計るべから

ず。故（か）かるがゆえに、瞿曇（ぐどん）の

口説（くぜつ）に、六珠（ろくしゆ）の價（あた）い、直ちに百千兩金な

り。建部隆勝

公、かつて異法伝授す。誠にすなわち香を聞きて、能くこれを知る聖

妙（せいみよう）を獲（え）使（し）めて、詳らかに産土郡縣（さんどぐん）とぐ

んけんを辨す。的（てき）に芬芳（ふんしょう）の浅

深を分かつ。時の人、竊（ひそ）かに以て名を假（か）りてこれを詰（つ

ぐ）れば、則ち、忽（たちま）ち真偽を別かつ

乎（や）、百發百中のみ。

時に天正第三乙未（亥）仲秋吉辰

洛下 翠竹庵道三これを筆す。

隆勝入道殿 参る

香爐之圖考正

釋香爐 釋字考うふ字書に

今、本書、異本を以つて「釋(たすき)」の字に改む。

舟香爐の下、灰五合と異本にあり。よ

つて、今これを補う。

緒のあまりこの分なり。「分」の字、一本、「通」に作る。

今これを改む。

長盆に聞香炉、三色かくのごとし。違棚に置くなり。

「置くなり」異本に違い棚に而(て)もに作る。この方、是な

るべし。因つて本書これを改む。

箸大平方 大平方と云う事、異本に

「先の方」に作る。これに随つて本書これを改む。

香起 異本、各々「香筋起」に作る。今これ

にしたがいて本書、「筋」の字を加う。

マタリ この香包の書き付けの「マ」の字、「二」の字

に異本に作る。よつて今これを改む。

香爐之図考正

釋香爐 「釋」の字、考うるに字書にこれ無し。

今、本書、異本を以つて「釋(たすき)」の字に改む。

舟香爐の下、「灰五合」と異本にあり。よ

つて、今これを補う。

緒のあまりこの分なり。「分」の字、一本、「通」に作る。

今これを改む。

長盆に聞香炉、三色かくのごとし。違棚に置くなり。

「置くなり」異本に違い棚に而(て)もに作る。この方、是な

るべし。因つて本書これを改む。

箸大平方 「大平方」と云う事、異本に

「先の方」に作る。これに随つて本書これを改む。

香起 異本、各々「香筋起」に作る。今これ

にしたがいて本書、「筋」の字を加う。

マタリ この香包の書き付けの「マ」の字、「二」の字

に異本に作る。よつて今これを改む。

奥書の中、日雲の二字、「曇」の一字に

に異本に作る。よつて今これを改む。

奥書の中、日雲の二字、「曇」の一字に

に異本に作る。よつて今これを改む。

役今異本によりて使字は改む

右、炭翁齋宗入香爐の図、考正し、図もまた、あしきものは画工に命じこれを改め侍る。

大枝流芳考正

武部隆勝香之筆記

香爐渡し申す次第の事

一 貴人に渡し申す事。香爐の置き前の足をまわし、左の手にすえ、右の手の指さきを香爐の中より下目にそえて、いかにも謹んで進上すべきなり。

一 等輩の人に渡しときは、これも香爐の置き前の足をまわし、左の手にすえて、右の手

作るべし。異本によりて、これを改む。

【役】 今、異本によりて「使」の字に改む。

右、炭翁齋宗入香爐の図、考正

し、図もまた、あしきものは画工に命じこれを改め侍る。

大枝流芳校正

建部隆勝香之筆記（三十四ヶ条）

香爐渡し申す次第の事

一 貴人に渡し申す事。香爐の置き前の足をまわし、左の手にすえ、右の手の指さきを香爐の中より下目にそえて、いかにも謹んで進上すべきなり。

一 等輩の人に渡しときは、これも香爐の置き前の足をまわし、左の手にすえて、右の手

香爐の口脇に添えて渡すなり。
 一 下輩の方へ渡す時は、右の手にて香爐の
 口脇取り、人さし指を一つあげて、下輩の者
 の手の上に置くなり。
 一 女房衆に渡すは、よきほどの所に下に置く
 べし。手に渡すべからずなり。
 一 盆にすえて香爐渡し申す時は、香爐の置き
 前の足、人の方へおしまわして遣わして、香

香爐の口脇に添えて渡すなり。
 一 下輩の方へ渡す時は、右の手にて香爐の
 口脇取り、人さし指を一つあげて、下輩の者
 の手の上に置くなり。
 一 女房衆に渡すは、よきほどの所に下に置く
 べし。手に渡すべからずなり。
 一 盆にすえて香爐渡し申す時は、香爐の置き
 前の足、人の方へおしまわして遣わして、香

一香爐床に置く事

懸け絵に釈迦、観音、達磨、布袋の類、懸けられば、茶の湯の時は、床に香炉を置くべからず。おもてむきの飴、三具足の時は、かくのごとくの人形絵も懸くべし。山水、花鳥、菓子絵などには香爐置くべし。また、香爐置き所の事、志野入道は、間香爐は床の軸さきに必ず置くべきよし申し候き。然りと雖も、当世は香爐、名物により候か。大略、床の中に置き候人多し。また、置き所、軸はすれを香炉の真ん中にあてて候か、または、軸はすれを盆のはしにあててか置き申し候。また、懸物なくば、貼付の次（継）ぎ目をめあてとす。なお、口傳に申すなり。軸もとは、小壺の置き所なる間、天目茶入れに置き合わせ申し候。何れもこの外のもの、置く事なし。一 飴に置く香爐に火をとらず、銀置かず、箸

一 香爐床に置く事

懸け絵に釈迦、観音、達磨、布袋の類、懸ければ、茶の湯の時は、床に香炉を置くべからず。おもてむきの飴、三具足の時は、かくのごとくの人形絵も懸くべし。山水、花鳥、菓子絵などには香爐置くべし。また、香爐置き所の事、

志野入道は、間香爐は床の軸さきに

必ず置くべきよし申し候き。然りと雖も、当世は香爐、名

物により候か。大略、床の中に置き候人

多し。また、置き所、軸はすれを香炉の真ん中

にあてて候か、または、軸はすれを盆のはしに

あててか置き申し候。また、懸物なくば、貼付の

次（継）ぎ目をめあてとす。なお、口傳に申すなり。軸もと

は、小壺の置き所なる間、天目茶入れに置き

合わせ申し候。何れもこの外のもの、置く事なし。

一 飴に置く香爐に火をとらず、銀置かず、箸

目は付く三方より一変は只灰と云ふわけ
 して紙糊きんして香又著目二門
 けう紙糊きんして付事も云々略也
 一銀の寸法九分四方角と一分切るなり
 にそわける銀
 一銀焼き銀を銀置かず空だきは床にもおき
 申し候。また座敷にても廣縁などにも中
 央卓の上にも置き候なり。
 但し焼く香炉ハ鴨の香炉、禪香
 爐、すべり香爐よく候なり。
 一香爐に入る火の炭、くぬ木(クスギ)の丸木をた
 つにおく。炭おこり候間、火をかえて、よく
 灰をあたたため申し候。炭は、兼ねてこしらえて
 置くなり。炭の長さ七分、はば四、五分なり。
 一火をとる事、囲炉裏、または風炉にても座
 敷にて取り申し候。自然、仕合せむつかしくば、

目は付け候。三度に一度は、ただ灰をかきあげ、
 はた(端)を能くきんじて置き候。また、箸目二つ
 ずつ、かぎ(嗅)香爐に付くる事もあり。略儀なり。
 一銀の寸法、九分四方、角を一分切るなり。いか
 にもあつき(厚)銀よし
 一 空焼きに銀置かず。空だきは、床にもおき
 申し候。また、座敷にても廣縁などにも中
 央卓の上に置くなり。

ただし、空焼きの香爐は、鴨の香爐、禪香
 爐、すべり香爐よく候なり。
 一 香爐に入る火の炭、くぬ木(クスギ)の丸木をた
 つにおく。炭おこり候間、火をかえて、よく
 灰をあたたため申し候。炭は、兼ねてこしらえて
 置くなり。炭の長さ七分、はば四、五分なり。
 一 火をとる事、囲炉裏、または風炉にても座
 敷にて取り申し候。自然、仕合せむつかしくば、

一 けしきも灰となり箸め二つづつ
 一 して之を灰なり箸め二つづつ
 一 一段は略儀なり
 一 卓にかぎ香爐置かざるなり
 一 香爐袋に入れて盆に置く事あり。その時
 一 香合、袋に入れず。惣別、香合は何時
 一 も袋に入れてよし。沈香入れる故なり。
 一 香爐名物にて、客人の度々所望候て
 一 取り出し候わば、五度^に三度は、火をとらず。ただ見
 せらるる事あり。また、兼ねて床にも置くべ
 し。香爐よくもなくば、火とらず置き、たか
 づ取り出すまじく候。
 一 香をたく事、空焼きには、いかにもこうばし
 く「はなばな」としたる沈香をたかれ候て
 然るべきのよし、申し伝うるなり。
 一 名香をば空焼きには焼かず候。

かげよりにも灰をおし、箸め(目)二つづつ
 にても、また置き前ばかりに箸め二つも付け申し候。
 一段これは略儀なり。
 一 卓にかぎ香爐置かざるなり。
 一 香爐袋に入れて盆に置く事あり。その時
 は、香合、袋に入れず。惣別、香合は何時
 も袋に入れてよし。沈香入れる故なり。
 一 香爐名物にて、客人の度々所望候て

取り出し候わば、五度^に三度は、火をとらず。ただ見
 せらるる事あり。また、兼ねて床にも置くべ
 し。香爐よくもなくば、火とらず置き、たか
 づ取り出すまじく候。
 一 香をたく事、空焼きには、いかにもこうばし
 く「はなばな」としたる沈香をたかれ候て
 然るべきのよし、申し伝うるなり。
 一 名香をば空焼きには焼かず候。

一雪雨中は、かならず香をたくよし、
 古人の申すなり。
 一名香一種は焚かず、二種然るべく候。また、折から
 静かにおもしろく候わば、三種にても五種に
 ても、後次第よき候を焼き申し候。
 一「太子」(「法隆寺」と号す)、「蘭奢侍」(「東大寺」と号す)、
 かくのごとく名物の香の内、焼き候わば、重ねて香つ
 がず候。たとい無案内にて「つがれ候らえ」と
 申すとも、「所持無き」よし然るべく候。また、香の道を
 知り候か、しらざるかを見んとて、しきりに
 所望の事あり。その時は、「沈外」と云う香
 然るべく候。沈外ならば、「赤梅檀」、「無名」、「丹霞」と
 申す香などよし。
 一十一種名物の香の事
 法隆寺(ほうりゆうじ) (太子(たいし)とも申す)
 蘭奢侍(らんじやたい) (東大寺)
 逍遙(しょうよう) 三芳野(みよし)

一雪雨中は、かならず香をたくよし、
 古人の申すなり。
 一名香一種は焚かず、二種然るべく候。また、折から
 静かにおもしろく候わば、三種にても五種に
 ても、後次第よき候を焼き申し候。
 一「太子」(「法隆寺」と号す)、「蘭奢侍」(「東大寺」と号す)、
 かくのごとく名物の香の内、焼き候わば、重ねて香つ
 がず候。たとい無案内にて「つがれ候らえ」と

申すとも、「所持無き」よし然るべく候。また、香の道を
 知り候か、しらざるかを見んとて、しきりに
 所望の事あり。その時は、「沈外」と云う香
 然るべく候。沈外ならば、「赤梅檀」、「無名」、「丹霞」と
 申す香などよし。

一十一種名物の香の事

法隆寺(ほうりゆうじ) (太子(たいし)とも申す)
 蘭奢侍(らんじやたい) (東大寺)
 逍遙(しょうよう) 三芳野(みよし)

紅塵 中川 古木 法花經 八橋 園城寺

一五十種の内乃香又その外の名香も四
季「恋」「雜」「祝言」、その折々をたくべし
一名香包紙の事。大包、小包あり。または香
合ちいさくば、なおも小包なるべし。

一名香十一種は包折よう、別にあり。
一香合に香包みて入る事、三種、五種よし。銀
をも入れ、包紙、ぎん、以下入れようあり。口傳に
申し候。

一香合に空焼きの沈香五きれ入るなり。沈の
寸、長さ三分、幅二分、厚さ一分なり。

一「鴨」、「をし(鴛)」、「獅」の香爐にて火を取り、香聞く事
あらば、羽にてわり(割)たる香爐は、頭を左へ

香道秘傳女三下

紅塵(こうじん) 古木(こぼく)
中川(なががわ) 法花經(ほつげきよう)
慮橋(はなたちばな) 八橋(やつはし)
(追加) 園城寺(おんじようじ)

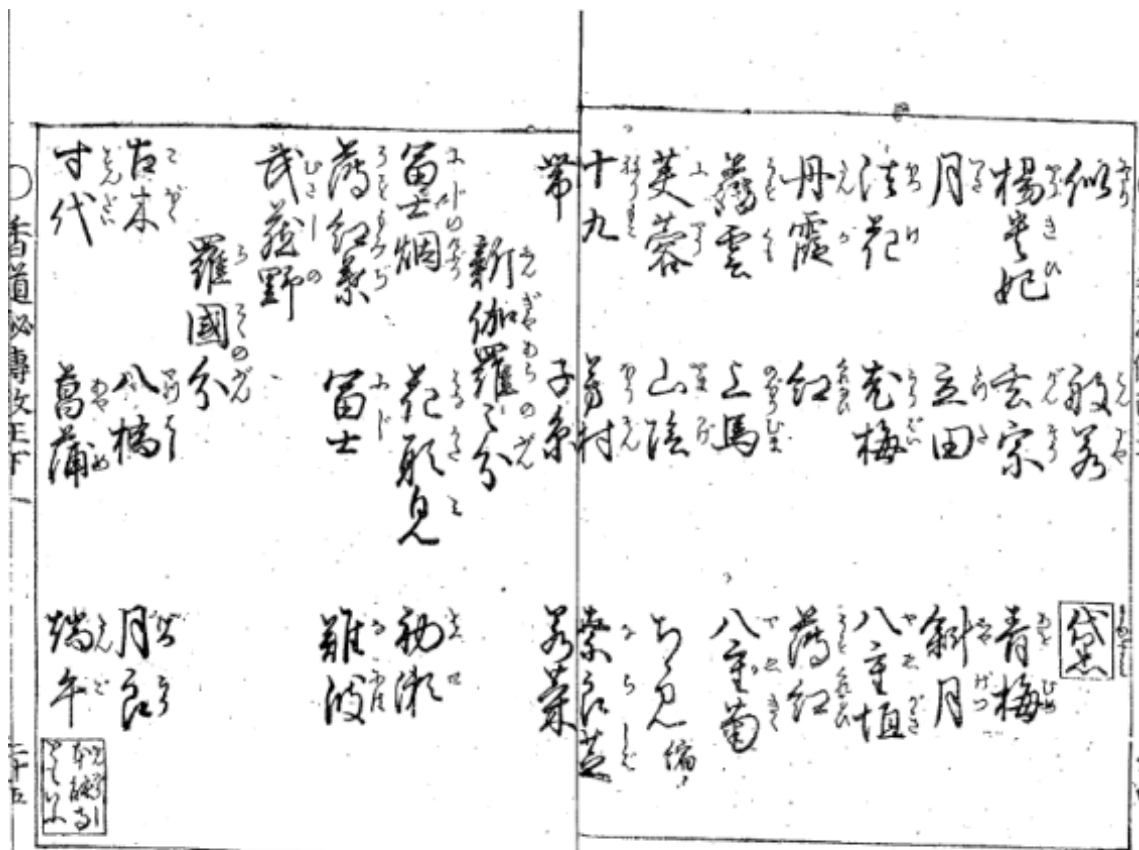
一五十種の内、の香、また、その外の名香ども、「四
季」「恋」「雜」「祝言」、その折々をたくべし。
一名香、包紙の事。大包、小包あり。または香
合ちいさくば、なおも小包なるべし。

一名香十一種は包折よう、別にあり。
一香合に香包みて入る事、三種、五種よし。銀
をも入れ、包紙、ぎん、以下入れようあり。口傳に
申し候。

一香合に空焼きの沈香五きれ入るなり。沈の
寸、長さ三分、幅二分、厚さ一分なり。

一「鴨」、「をし(鴛)」、「獅」の香爐にて火を取り、香聞く事
あらば、羽にてわり(割)たる香爐は、頭を左へ

てよし。主人は礼に及ばず。等輩の人には一礼これあるべし。
 一 火を取りたる香爐、盆にすゆる(据)時、香爐の底をさぐり、あつ(熱)くば盆にすえず。盆に跡付く故なり。
 一 香爐の灰を押す事、中をせがいより少し高く(か)きあげておすべし。
 一 香爐一かどなくば、火をとらずしては、床の置物に置かず。「塩げ」の類は、あいしら
 一 香爐一うくなくば、火をとらずしては、床の置物に置かず。
 一 名香は焼く時、空焼き禁する物なり。
 一 香箸の事。ぞうがん、金鉄、その外、色々これ有ると雖も、「高麗箸」なお能く候。長さ七寸ばかりなるをこれを用ゆるなり。
 伽羅の分
 東大寺(とうだいじ) 逍遙(しょうよう) 法花經(ほつけきょう)
 三吉野(みよしの) 紅塵(こうじん) 園城寺(おんじょうじ)



似(にたり) 般若(般若) 黛(まゆずみ)

楊貴妃(ようきひ) 玄宗(げんそう) 青梅(あおうめ)

月(つき) 立田(たつた) 斜月(しゃげつ)

法花(ほつけ) 老梅(ろうばい) 八重垣(やえがき)

丹霞(たんか) 紅(くれなゐ) 薄紅(うすくれなゐ)

薄雲(うすぐも) 上馬(のぼりうま) 八重菊(やえぎく)

芙蓉(ふよう) 山陰(やまかげ) ちぢ見(ちぢみ)(縮)

十九(ねりもこ) 芳村(ほうそん) 奈良芝(ならしば)

帶(おび) 子糸(こいと) 若葉(わかば)

新伽羅の分

富士烟(ふじのけぶり) 花形見(はながたみ) 初瀬(はつせ)

薄紅葉(うすもみじ) 富士(ふじ) 難波(なにわ)

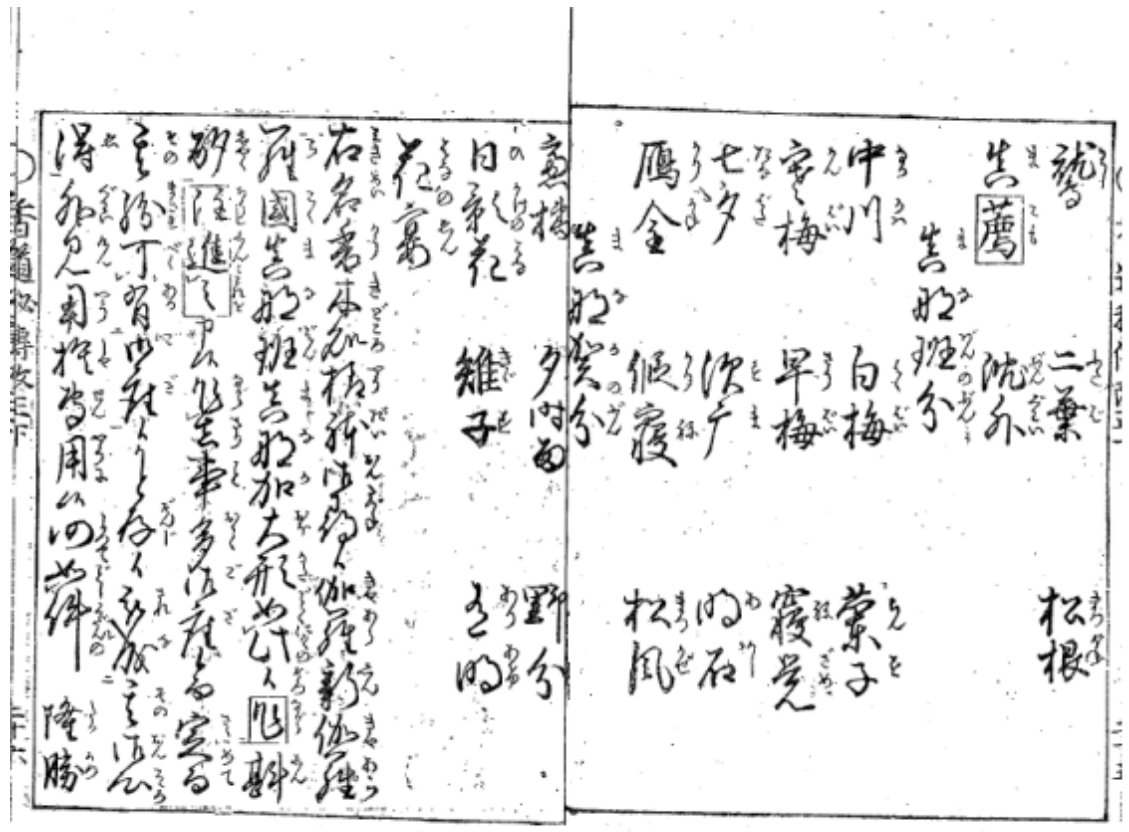
武蔵野(むさしの)

羅國の分

古木(こぼく) 八橋(やつはし) 月良(げつろう)

寸代(すんだい) 菖蒲(あやめ) 端午(たんご)

(本能寺ともいう)



鷺(わし) 二葉(ふたば) 松根(まつがね)
真薦(まこも) 沈外(じんがい)

真那班の分

中川(なかがわ) 白梅(はくばい) 蘭子(らんす)
寒梅(かんばい) 早梅(そうばい) 寢覚(ねさめ)
七夕(たなばた) 須磨(すま) 明石(あかし)
雁金(かりがね) 假寝(かりね) 松風(まつかぜ)

真那賀の分

慮橘(はなたちはな) 夕時雨(ゆうしぐれ) 野分(のわき)
日影花(ひかげのはな) 雉子(きぎす) 有明(ありあけ)
花宴(はなのえん)

右、名香、木所、様躰御尋ね候。伽羅、新伽羅、
羅国、真那班、真那加、大形かくのごとくに候。斟
酌ながら、これを注進し申し候。さりながら、事多く御座候て
定めてその紛れ有るべく御座候かと存じ候。その御心
得なされ、外見用捨専用に候。仍て件のごとし。

隆勝

名香園（名）事（事）

一法隆寺
太子

恭誦經文
降く

一 東 寺 とうじ
仙 苑 せんえん
寺 てら
又 また
寺 てら
寺 てら

今又此種て又やむく

又曰夜月と云うては後漢書

有るくはふも金や

大なるものごとくゆれんゆれんおれや國
君

三 吉野 依 隆 岡 東 大 学 工 学 部 学 生

智^チ以^イ希^キも^もと^とう^うう^うす^すは^は行^{ギョウ}る^るは^は後^ゴ

八景同安

法華經 伽藍經 入道要略 卷之三

子後より我々て大業あり同ト

一「法隆寺」「太子」

赤梅檀。聞きいかにもやさしく、きやしや（華奢）に涼しく御座候。

一「東大寺」伽羅。聞きをそく(遅)出る。また、聞き失せ候ように御座候て、また、聞き出申し候。かよう

に四、五度ほど御座候て、以後、次第に聞き
かろく候。ひややかに香り出申し候。

一「逍遙」伽羅。聞き、心は早く出申し候。香は「東大寺」よりは、うすく御座候。以後は、前の聞き同前。

一「三吉野」伽羅。聞き、「東大寺」よりは少し早く
出申し候。香もすこしうすく御座候て、以後
は前同前。

一「法花經」伽羅。聞きは、いかにも和か(やわらか)に、古く殊勝に御座候て、火末、前に同じ。

一「紅塵」伽羅。聞き、少し遅く出申し候、香ふる
 く、そこからき(辛)聞き御座候。これは「楊貴妃」の
 とめ香の由、一説に申し伝え候。火末、前に同じ。
 一「古木」羅國のうちより出申し候。聞き、先日
 御前において焼き申し候。「菖蒲」と大形同前に候。
 然りと雖も、少し香静かに候。ほそがたき聞き御座候。
 火ずえ、「菖蒲」よりうすく御座候。
 一「中川」聞き、上々の真那班。如何にも香ふるく
 御座候て、花やかにかろがろと御座候。
 一「八橋」羅國のうちより出申し候。「菖蒲」同
 前。然りと雖も、香閑(しずか)に古木より花やかに
 御座候。火ずえは、「古木」同前。
 一「花橘」聞き、まなかの上。焼出しはやく、
 つよく出申し候て、やがて失せ申し候。三人より
 外は、きかれ申さず候。
 一「園城寺」聞き、上々の伽羅の由申し候。方々において

一「紅塵」伽羅。聞き、少し遅く出申し候、香ふる
 く、そこからき(辛)聞き御座候。これは「楊貴妃」の
 とめ香の由、一説に申し伝え候。火末、前に同じ。
 一「古木」羅國のうちより出申し候。聞き、先日
 御前において焼き申し候。「菖蒲」と大形同前に候。
 然りと雖も、少し香静かに候。ほそがたき聞き御座候。
 火ずえ、「菖蒲」よりうすく御座候。
 一「中川」聞き、上々の真那班。如何にも香ふるく

御座候て、花やかにかろがろと御座候。
 一「八橋」羅國のうちより出申し候。「菖蒲」同
 前。然りと雖も、香閑(しずか)に古木より花やかに
 御座候。火ずえは、「古木」同前。
 一「花橘」聞き、まなかの上。焼出しはやく、
 つよく出申し候て、やがて失せ申し候。三人より
 外は、きかれ申さず候。
 一「園城寺」聞き、上々の伽羅の由申し候。方々において

ヤリとて次たりきと聞き
るふなり

已上十一種

一「似」聞き上々の伽羅。「東大寺」より位(くらい)御座無く候。
聞きはやく出申し候。火末は、「東大寺」と同前。
一「富士烟」聞き、新伽羅。先日「花形見」と同前。

一「菖蒲」木所、羅國。聞きは、少しも羅國の聞き
御座無く候。先日、御物の「あやめ」、御前において
焼き申し候。残り木、進上仕り候。また、「本能寺菖蒲」
と申して、一筋御座候。同じく進上申し候。この香
は、前の「あやめ」よりは香健やかに御座候。
一「般若」聞き、「黛」と同前。上々の伽羅。焼き出
しは、少しあたらしく御座候。火末は
「似」と同前。
一「鷓鴣斑」聞き、本銘の香、手次いまだ聞き

聞き申し候とも、手次(てつき)ただしきを聞き申さず候
間、存ぜず候。

已上十一種

- 一「似」聞き上々の伽羅。「東大寺」より位(くらい)御座無く候。
- 聞きはやく出申し候。火末は、「東大寺」と同前。
- 一「富士烟」聞き、新伽羅。先日「花形見」と同前。
- 一「菖蒲」木所、羅國。聞きは、少しも羅國の聞き御座無く候。先日、御物の「あやめ」、御前において焼き申し候。残り木、進上仕り候。また、「本能寺菖蒲」と申して、一筋御座候。同じく進上申し候。この香は、前の「あやめ」よりは香健やかに御座候。
- 一「般若」聞き、「黛」と同前。上々の伽羅。焼き出しは、少しあたらしく御座候。火末は「似」と同前。
- 一「鷓鴣斑」聞き、本銘の香、手次いまだ聞き

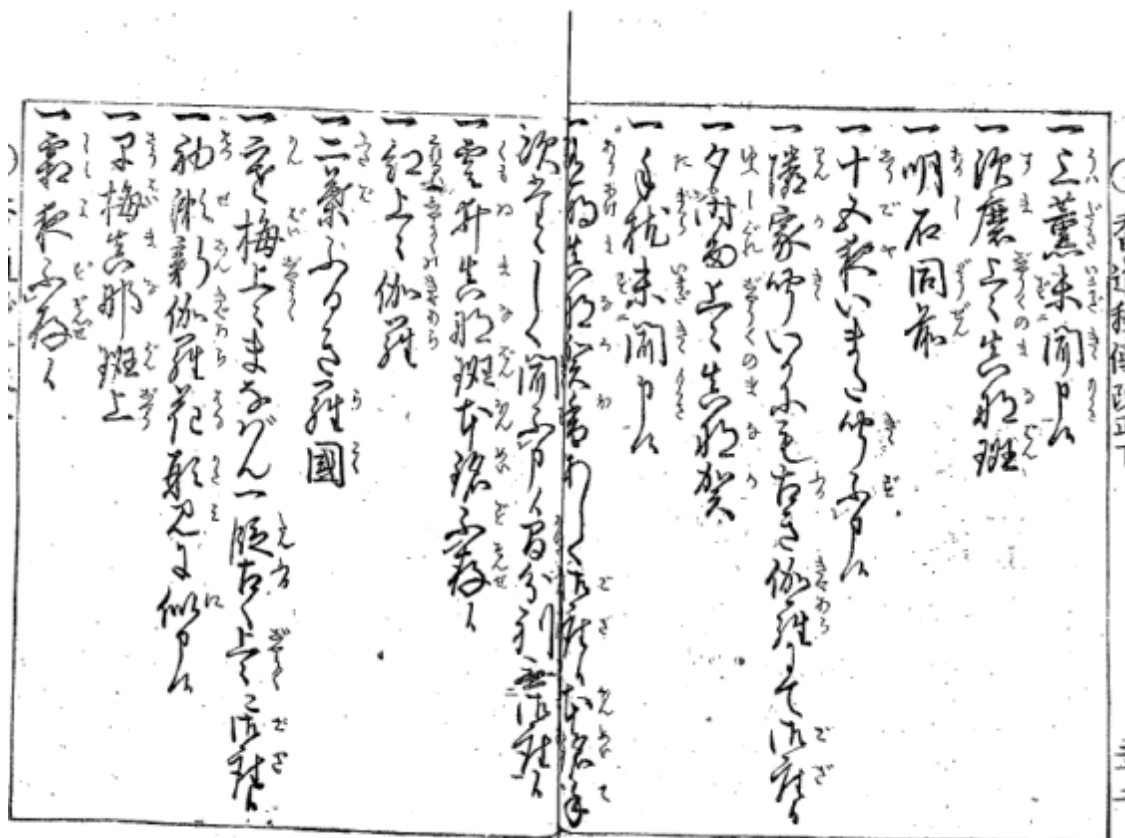
青梅木所伽羅木色うすくしろく
 飛梅いまだ本銘きき申さず候
 種嶋本銘聞き申さず候。前々聞き申し候と雖も
 慥(たしか)に覚え申さず候。
 漆標上々の伽羅。然りと雖も、手次の本銘、慥
 に聞き申さず候間、分別御座無く候。

申さず候間、分別御座無く候。何の木所にて
 も、ふをきり申し候て、木色黄に候わば、
 「しゃこばん」なり。
 「楊貴妃」上々の伽羅。聞きうつくしく、こ
 うばしき内、針にて「しかしか」とつき申し候様な
 る聞き御座候。火末は「似」と同前。
 「玄宗」上々伽羅。聞きうつくしく候て、「まる
 まる」としたる聞き御座候。香、一段ふるく、火

ずえは「楊貴妃」と同前。
 「青梅」木所、伽羅。木色うすく、しろく
 御座候て、青梅のきき御座候。
 「飛梅」いまだ本銘きき申さず候。
 「種嶋」本銘聞き申さず候。前々聞き申し候と雖も
 慥(たしか)に覚え申さず候。
 「漆標」上々の伽羅。然りと雖も、手次の本銘、慥
 に聞き申さず候間、分別御座無く候。

一月上々伽羅。聞きいかにも古く、かろく、
 花やかに御座候。「小糸伽羅」「月」に似申し候。
 禁中より出申し候。
 「龍田」上々の伽羅。古今にも稀なる聞き
 御座候なりと申し伝え候。「山陰」も同前のよし
 申しならわし候。
 「紅葉賀」手次たしかに聞き申さず候間、
 分別無く御座候。
 「斜月」聞き、「立田」に似申し候。上々の伽羅にて
 御座候。
 「白梅」上々の真那斑に御座候。「中川」よりは、
 香健やかに御座候。
 「千鳥」聞き、上々の伽羅に御座候。手次たし
 かに聞き申さず候て、分別御座無く候。
 「法花」伽羅。聞き、珍しき聞きに御座候由、申し候。
 本銘存ぜず候間、分別御座無く候。

一「老梅」木処は伽羅に御座候えども、伽羅の
 やうには御座無く候。一段めずらしき聞き御座候。
 一「八重垣」木処、伽羅。聞き、香健やかに御座候。
 一「花宴」正銘聞き申さず候。稀に聞き申し候わば、
 真那賀の香あしく候間、分別御座無く候。
 一「花雪」前に同じ。
 一「賀」前に同じ。
 一「蘭子」聞き、上々真那斑。一段と古く上々
 に御座候。
 一「卓」存ぜず候。
 一「橘」聞き、上々の真那賀。「花たち花(盧橘)」よりは、
 聞き静かに御座候て、未ひさしく御座候。
 一「花散里」聞き申さず候。
 一「丹霞」木所、伽羅。聞き健やかに御座候。進上仕り候。
 一「花形見」聞き、新伽羅。一段花やかにめず
 らしく御座候。



- 一「上薫」未だ聞き申さず候。
- 一「須磨」上々の真那斑。
- 一「明石」同前。
- 一「十五夜」いまだ聞き申さず候。
- 一「隣家」聞きいかにも古き伽羅にて御座候。
- 一「夕時雨」上々の真那賀。
- 一「手枕」未だ聞き申さず候。
- 一「有明」真那賀。香あしく御座候。本銘、手

- 次ただしく聞き申さず候間、分別御座無く候。
- 一「雲井」真那斑。本銘存ぜず候。
- 一「紅」上々伽羅。
- 一「二葉」ふるき羅国。
- 一「寒梅」上々まなばん。一段古く上々に御座候。
- 一「初瀬」新伽羅。「花形見」に似申し候。
- 一「早梅」真那斑上。
- 一「霜夜」存ぜず候。

一「寢覚」真那斑。上。但し、本銘聞き申さず候。慥に存ぜず候。
 一「七夕」いかにも古き真那斑。上。
 一「篠目」伽羅。但し、本銘慥かに存ぜず候間、分別御座無く候。
 一「薄紅」伽羅。聞きかうく御座候。
 一「薄雲」同前。
 一「上馬」上々の伽羅。
 一「本処」事伽羅。羅國、真那斑、真那賀、何れもその内、上々の銘香、由緒、手継ぎたたしきを五炷程すつ聞し召され候はば、自然に本所は御覚え御座有るべく候哉(や)。
 一「鼻の心持ちの事」右重左半(うちようさはん)と申す事御座候。口上申し入るごとく候。御分別有るべき事。
 一「香焼き」ようの事、「寒梅」冬の季に入り申し候てより、冬至にいたるまで然るべく候。これ過ぎ候てより、冬至よりさうまで、然るは是過え

「早梅」よく御座候。四季ともに、この心持ち
然るべく候哉の事。
一火あいの事、大きな火を入れて、しばらく
逗留候て、いかにも火をふるくなして、底
をつよく、上をよわき程なるようよく候。
とけく上をよわき程なるようよく候。

右、この一冊、憚り至極迷惑に候たりと雖も、内々、御
意の由に候間、是非に及ばず、存知の旨申し上げ
候。「一向無功（いつこうぶこう）」の儀に候間、相違のみ御座有るべ
く候。
他の嘲り如何にに御座候条、その御心得なされ、
御隠密を以つて、御披露仰ぐ所に候。恐惶謹言。

天正元年十月吉日

道甫 参る

建部
隆勝 在判

は「早梅」よく御座候。四季ともに、この心持ち
然るべく候哉の事。
一火あいの事、大きな火を入れて、しばらく
逗留候て、いかにも火をふるくなして、底
をつよく、上をよわき程なるようよく候。

右、この一冊、憚り至極迷惑に候たりと雖も、内々、御
意の由に候間、是非に及ばず、存知の旨申し上げ
候。「一向無功（いつこうぶこう）」の儀に候間、相違のみ御座有るべ
く候。
他の嘲り如何にに御座候条、その御心得なされ、
御隠密を以つて、御披露仰ぐ所に候。恐惶謹言。

天正元年十月吉日

道甫 参る

建部
隆勝 在判

建部氏香之記考正

惣別ハハの字衍文今削る

五度三度此の字の下に字異なり

あり本書今補ふ

法隆寺蘭奢待かた書きの一二の字

別本には各々なし後人の加筆なるべし

故なきことなり今これを削る

折りよう別にあり一本に別にすべし

に作る

忽て今「恐れて」に改む宗温の書にも「恐れ

て」に作る

香の数候て「候て」の字、異本に「を」に作る。これに

随いて、今、本書これを改む。

高くうき「う」の字「か」に作るべし。今、本書

これを改む。

あいしらひと「と」の字「に」の字に作るべし。

建部氏香之記考正

惣別はこの「は」の字、衍文。今これを削る。

五度三度この「五度」の下に「に」の字、異本に

あり。本書、今これを補う。

「法隆寺」「蘭奢待」かた書きの「一」「二」の字、

別本には、各々なし。後人の加筆なるべし。

故なきことなり。今これを削る。

折りよう別にあり 一本に「別にすべし」

に作る。

忽て今「恐れて」に改む。宗温の書にも「恐れ

て」に作る。

香の数候て「候て」の字、異本に「を」に作る。これに

随いて、今、本書これを改む。

高くうき「う」の字「か」に作るべし。今、本書

これを改む。

あいしらひと「と」の字「に」の字に作るべし。

本書今改む

代黒 黛よりゆづり法本各同

ちぢ見 縮イ 子りの細字後人の注なり

ちぢ見 縮イ 子りの細字なりと云ふ

今削く 何のなるも事なり

端午 此下 縮イ 子り 縮イ けり

よわり 今補く 博廣より

生簾 簾字不るゆ 今い 簾 簾

の字を改む

如候 斟 酌 下 斟字の上 下 斟字の上 下 斟字の上

字 異本にあり 今、本書これを補う

近々 異本に「注し、これを進し申し候」に作る。今、本書、これによつて改め正す。

書 ぼそがたき 一小…未明 この書き入れ、舊板にこれあり。今、本書これを削る。無用の事なればなり。「ぼそがたき」

聞きと云う事を後人あやしく思ひて、この注

同と云ふと後人あやしく思ひて、この注

本書今これを改む。

代黒 「黛」に作るべし。諸本各々同じ。

ちぢ見 縮イ 子り 短イ この下の細字、後人の注なり。

「ちぢ見」は「縮」の字なりと云う事なり。子り 短イ この註、今これを削る。何の故なきことなり。

端午 この下「本能寺とも云う」と細註、異本

にあり。今これを補い博廣（はくこう）にその（備）う。

真簾 「簾」の字、分明（ぶんめい）ならず。今、異本を以て「簾」（この）

の字に改む。

（この）

の字に改む。

如此候 斟 酌 「候」の下、「斟」の字の上、「乍」（ながら）の

字 異本にあり。今、本書これを補う。

雖近々 異本に「注し、これを進し申し候」に作る。今、本

書、これによつて改め正す。

ぼそがたき 一小…未明 この書き入れ、舊板にこれあり。今、本書

これを削る。無用の事なればなり。「ぼそがたき」

聞きと云う事を後人あやしく思ひて、この注

と添ふとりてよりなり細くも同と
 云事わづー
 代黒と同前 今、代黒より考前に同
 一貴梅 貴字、當に「青」に作るべし。諸本これに同じ。
 建に御座候 「建」の字、恐らくは「健」の字なるべきか。
 「すこやか」と読むべし。
 八重垣 この下「木」の字、脱す。異本を以て今これを補う。
 一「花雪」前に同じ この下「一焼き前に同じ」
 の文あり。他本各々これ無し。これを考うるに、また、何の
 故なし。これに依つて本書これを削る。
 一「花」聞き申さず 舊板、「花」の字の下「散里」
 の二字脱す。今、異本を考え本書これを補う。
 そのうち上々を「上々の」に作るべし。本書こ
 れを改む。
 五炷斗 「斗」の字、一本、「程」に作る。今これを改む。
 つみ この字衍文ゆえ、今これを削る。

を添ゆると見えたり。なるほど「細がたき」聞きと
 云う事あるべし。
 代黒と同前 今、「黛」に改む。考え、前に同じ。
 一貴梅 「貴」の字、當に「青」に作るべし。諸本これに同じ。
 建に御座候 「建」の字、恐らくは「健」の字なるべきか。
 「すこやか」と読むべし。
 八重垣 この下「木」の字、脱す。異本を以て今これを補う。
 一「花雪」前に同じ この下「一焼き前に同じ」

の文あり。他本各々これ無し。これを考うるに、また、何の
 故なし。これに依つて本書これを削る。
 一「花」聞き申さず 舊板、「花」の字の下「散里」
 の二字脱す。今、異本を考え本書これを補う。
 そのうち上々を「上々の」に作るべし。本書こ
 れを改む。
 五炷斗 「斗」の字、一本、「程」に作る。今これを改む。
 つみ この字衍文ゆえ、今これを削る。

以下正字脫今以愛字補之

此一本志乃公一

久桑海一がまにう今に要

の字上冬字彙中に有る

今本書補之

後一
本やう
とせし
て本を

一向五此五の字れ下功

の字裏に肖し今に虫補之

本居又仙今改与己美而己

此本古蹟

の字一かあり又道南

と云ふ名ありて今補て道南ハ

宗拾門人

被聞 この下「召」の字脱す。今、異本を以つてこれを補う。

「由」一本「者」に作る。「いひ候」一本

これ無し。文章通じがたきにより、今、異本に随いこれを改む。

「寒梅」の季の字の上「冬」の字、異本にこれあり。

今、本書これを補う。

程なる儀「儀」の字、一本に「よう」に作る。今、本書これを改む。

奥書の中一向無
この無の字の下「功」

の字、異本にこれあり。今、本書これを補う。其

本「間」に作る。今これを改む。「与已」異本「而已」(のみに作る。本書これに随い改め正す。

隆勝の「在判」の字、一本にあり。また、「道甫参」

と云う当名(あてな)あり。本書、今これを補う。道甫は、宋拾門人なり。

右建部氏香之筆記誤字脱漏
考正する事也

大枝流芳考正

十組香之記

十炷香之記

芭蕉	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一

右、建部氏香之筆記、誤字、脱漏
考正する事かくの如し

大枝流芳考正

十組香之記

○十炷香之記

札十二枚にてやん十柱香の包やう
 常のごとし。三色を三包ずつ九包、また別の
 香を「色客」とするなり。札十二枚は「一」の
 札三つ、「二」の札三つ、「三」の札三つ、「客」の札三つ
 なり。火本より香をつぎ出し候を右の
 手にてとり、左の手にすえ、右の手をお
 おいて覆聞くなり。香炉を畳の上に置きて、
 次の人にわたし候時、火本より札筒を出し
 申し候。「一」の札を入れ次の人の前におくなり。
 何れも「一」の札を入れて次々へまわすなり。二番
 の香出候時、初めの匂いと同じ物と聞き候
 時は、また「一」の札を入れ候なり。三番の時一番
 に出たる香と聞き候時は、また「一」の札を入れるなり。
 二番に出たる香と聞き候時は「二」の札を入れ候なり。
 一にても二にてもなきと聞き候時は「三」の札
 を入れ候なり。何れも匂いよく聞き覚え、「一」の札入れたる

札十二枚にてやん十柱香の包やう
 常のごとし。三色を三包ずつ九包、また別の
 香を「色客」とするなり。札十二枚は「一」の
 札三つ、「二」の札三つ、「三」の札三つ、「客」の札三つ
 なり。火本より香をつぎ出し候を右の
 手にてとり、左の手にすえ、右の手をお
 おいて覆聞くなり。香炉を畳の上に置きて、
 次の人にわたし候時、火本より札筒を出し

申し候。「一」の札を入れ次の人の前におくなり。
 何れも「一」の札を入れて次々へまわすなり。二番
 の香出候時、初めの匂いと同じ物と聞き候
 時は、また「一」の札を入れ候なり。三番の時一番
 に出たる香と聞き候時は、また「一」の札を入れるなり。
 二番に出たる香と聞き候時は「二」の札を入れ候なり。
 一にても二にてもなきと聞き候時は「三」の札
 を入れ候なり。何れも匂いよく聞き覚え、「一」の札入れたる

香と聞き候時は、何時も「一」の札を入れ、「三」の札入れ
 たる香とおもひ候時は、「三」の札を入れ候なり。
 四番の時、一にても二にても三にてもなき
 とおもひ候時は「客」の札を入れ候なり。一番に出たる
 香かさねて出ざる時は、聞きおさめ候まで「一」の札
 を二枚残し置くなり。則ち一番の香、客なり。これを
 「初客」と申すなり。「一」の札にても「二」の札にても「三」の
 札にても、また「客」の札にても類なきと思ひ候

を二枚残すなり。これ客なり。十番に客出
 候をば「すて客」と云うなり。客に点かくる事、
 一客は点四つ、二からは点二なり。札入れ候次第
 は「一、二、三、客」と次第するなり。
 点のかけよう、前後むすびたるをあたり
 とするなり。図に詳(つまびらか)なり。
 座中の札を一枚ずつ札筒に入れ、火本に渡
 し申す時、一を「一の折居」に移し二を「二の

折居より門を脱ぎも同様也十炷終り
 一の折居よりひきばすくまれの
 のぐく記録紙は虫のさる也香包紙
 と一度くまの串にさし十包と居さ
 くて包紙もこれさるやうに串とせ
 まぬもさる下へさるへ一つとり
 て包紙と用さ記録紙は書付也
 銀葉十枚は度々の香のかえしとのせ
 下へさる銀盤はさるへ也
 記録紙は点と書く時は、両点、数に入る。「聞」(きき)と付く
 時は両点も一つになるなり。
 下に聞きの数を書く時、貴人には「三炷」「五炷」
 と「炷」の字を書くなり。平人にはただ「三」「五」と書くなり。
 札の絵をかしたらに二字ずつに書きて、名乗
 をかた(肩)に付くるなり。貴人の御名字をば、一字
 程あげて書くなり。札にて聞く香は皆同じ。

折居にうつす。終わりまで同じ様なり。十炷終わり
 候て、「一」の折居よりひらき、次第次第に札
 のごとく記録紙に書きのする(載)なり。香包の紙
 を一度一度に「さし串」にさし、十包を皆さし
 候て、包紙まぎれさるやうに「さし串」と共
 にぬき、上を下へたてなおし、一つとり
 て包紙を開き、記録紙に書付くるなり。
 銀葉十枚に度々の香のかえしをのせ、次第

をたがえず銀盤にならべ置くなり。
 記録紙に点と書く時は、両点、数に入る。「聞」(きき)と付く
 時は両点も一つになるなり。
 下に聞きの数を書く時、貴人には「三炷」「五炷」
 と「炷」の字を書くなり。平人にはただ「三」「五」と書くなり。
 札の絵をかしたらに二字ずつに書きて、名乗
 をかた(肩)に付くるなり。貴人の御名字をば、一字
 程あげて書くなり。札にて聞く香は皆同じ。

けりやうきとやうと名乗らふは教
 の下は「無」の一字を書きあはれりやう
 われは点とくは也是わたりる也名
 乗どしてはるるは不書と金
 かりる座の一具は名乗と記し
 する事もありとや

○花月香之記

月一花二月三月二花三花一客

梅花月一花二月三月二花三花一客九

綠竹花一月二花三月三月一花二客一

芙蓉月二花二月一月三花三花一月一持

花方点八

月方名茶

芙蓉月二月三花二花三月一花一客持

芭蕉花三月一月三花一月二花一花五

青松花一月二月一月三月二花二月四

月方星九 月方星了

はじめより「無を聞くべき」と名乗りたるには、数
 の所に「無」の一字を書くなり。もし、あたりたる
 あれば点をかくるなり。これあたらずるなり。名
 乗らずして無になりたるをば書かずに置く
 なり。その座の一興に「無太郎」と記し
 たることもありしとや。

○花月香之記

花月香の事。香六色を二つ宛、十二包なり。
六包には「花一」、「花二」、「花三」、「月一」、「月二」、「月三」と
香包のうえに書き付けて、この六包を試みに出し候。
残り六包は包紙のうちに「花一」、「花二」、「花三」、「月
一」、「月二」、「月三」と書くなり。かきまぜて傍らにおき、
さて試の香を出し候時、「これは花一」、「これは花二」、「これは

花三」、「これは月一」、「これは月二」、「これは月三」と火本
より名乗り候て出し候なり。但し、香爐二つ、火本二
つ（人）なり。「花方」左に居、「花方」より三炷出し
後、「月方」より出すなり。試過ぎて六包の内、何
れにても一包取りて「花方」より出し申す時、右の
試の香に思い合わせ、花の一と思えば「花の
一」の札を入れ候、また月一と思ひ候えば「月一」の札
を入れ候なり。残る札も同じ。また、「客」を入れ候ても聞き候
と入る残る札も同じ。又客と入ても同じ。

花月共に星ばかりの時は多少を論
ぜず「持」とするなり。

花月香の事。香六色を二つ宛、十二包なり。

六包には「花一」、「花二」、「花三」、「月一」、「月二」、「月三」と
香包のうえに書き付けて、この六包を試みに出し候。

残り六包は包紙のうちに「花一」、「花二」、「花三」、「月

一」、「月二」、「月三」と書くなり。かきまぜて傍らにおき、

さて試の香を出し候時、「これは花一」、「これは花二」、「これは

花三」、「これは月一」、「これは月二」、「これは月三」と火本

より名乗り候て出し候なり。但し、香爐二つ、火本二

つ（人）なり。「花方」左に居、「花方」より三炷出し

後、「月方」より出すなり。試過ぎて六包の内、何

れにても一包取りて「花方」より出し申す時、右の

試の香に思い合わせ、花の一と思えば「花の

一」の札を入れ候、また月一と思ひ候えば「月一」の札

を入れ候なり。残る札も同じ。また、「客」を入れ候ても聞き候

さう追加と聞くと早時ハ客と云ふ也
追加の事香終わりて右、六炷の香を本(もと)の
ごとく包みまたその外のかわりたる香を客の
包紙につつみて、六炷のなかへませ候なり。何れなり
とも取りて、火本よりつぎ出し申し候時、「六炷
のうち」と聞き候時、「月」にても「花」にても思ひより
候札を入れ候なり。「六炷の外」と聞き候時は、
「客」の札を入れるなり。

追加の時の事。花月の香出たる時、当
りは点三つ、星は常のごとし。「花・月」を「客」
と聞きたる時は、一人なれば星七つ、利を得ん
ために出したる故なり。二人なれば星五つ、
三人以下(いげ)、星三つ宛なり。「客」の時、当り一人
なれば点五つ、三人以下、点三つ宛なり。
客を「花・月」と聞きたる時は星三つなり。

○宇治山香之記

○宇治山香之記

宇治山香の事、香五色を十にして五
 包には上に銘を書き、五包にはかくして中に
 書くなり。五包の試を出し候時、書付のごと
 く「これは我庵は」、「これは都のたつみ」、「これはしか
 ぞすむ」、「これは世をうぢ山と」、「これは人はいふ
 なり」と五包ながら名乗りて出し候なり。さて、試過ぎ
 て五包の香のうち何れなりとも一炷つぎ
 出し候時、「我庵は」となりとも、「都のたつみ」と
 なりとも、心次第に札紙のおくに書付け、上
 に我が名乗を書きて出し、硯箱のふたに入れ

うわひん

ふこり

同 同

小鳥香は試なし。香五色を二つ宛十
 包にして「一、二、三、四、五」、「一、二、三、四、五」と対し
 置くなり。包紙、十炷香に同じ。さて、二つ
 にわけ置く何れなりとも一包取りかえ、五
 包をませ合わせ出し申し候時、たとえば「一、一、二、三、四」
 と出候とおもひ候時は、「ももちどり」と云う名
 乗りを札紙に書付候。「一、二、三、四、三」と出候と
 思ひ候時は、「あさりどり」と書付け候なり。「一、二、三、
 三、四」と出申し候と思ひ候時は、「いしたたき」と
 書付け候なり。餘、皆同じ。座中の札紙そろ
 い候て、一々記録紙に写し、さて、香包
 を開き、当りに点をかけるなり。

○郭公香之記

一名香 二名香 三名香
 四名香 六名香 他四六一般

○郭公香之記

一	名乗	郭公香はめんめんのものが聞き覚えたるを一切れ包み、包紙の上に我が名を書付け出し申し候。火本、請け取り、香のたけ(丈)幅同じ様にそろえ、
二	名乗	同じ色に染めて包みかえ、おく(奥に隠し)にそれぞれの名乗を書付くるなり。聞き納め候て、「何番目の香、我が香」と思ひ候時、札紙のうちに「一」となり
三	名乗	共、「二」となりとも心次第に書付け、上に名乗りを書き出し申し候。さて、札紙を開き、記録紙に「一だれ」「二誰」と書きのせ、その後、面々の包紙を開き、記録紙の端に書きのせ、当り
四	名乗	に点をかけ、当らざるに星をいたし候なり。
五	名乗	
六	名乗	

郭公香はめんめんのものが聞き覚えたるを一切れ包み、包紙の上に我が名を書付け出し申し候。火本、請け取り、香のたけ(丈)幅同じ様にそろえ、同じ色に染めて包みかえ、おく(奥に隠し)にそれぞれの名乗を書付くるなり。聞き納め候て、「何番目の香、我が香」と思ひ候時、札紙のうちに「一」となり共、「二」となりとも心次第に書付け、上に名乗りを書き出し申し候。さて、札紙を開き、記録紙に「一だれ」「二誰」と書きのせ、その後、面々の包紙を開き、記録紙の端に書きのせ、当りに点をかけ、当らざるに星をいたし候なり。

自然、兩人同じ香を出す事あり。その時は、
 はじめに出たるを先ず記して、後に出たる
 を「同前か」と書くなり。たとえば「一、三」同じ香の
 時、札紙にも「一、三 同前か」と書くなり。いく
 たり(幾人)ありても書き様同じ。聞き当てたる、殊
 更(ことさらに)手柄なり。

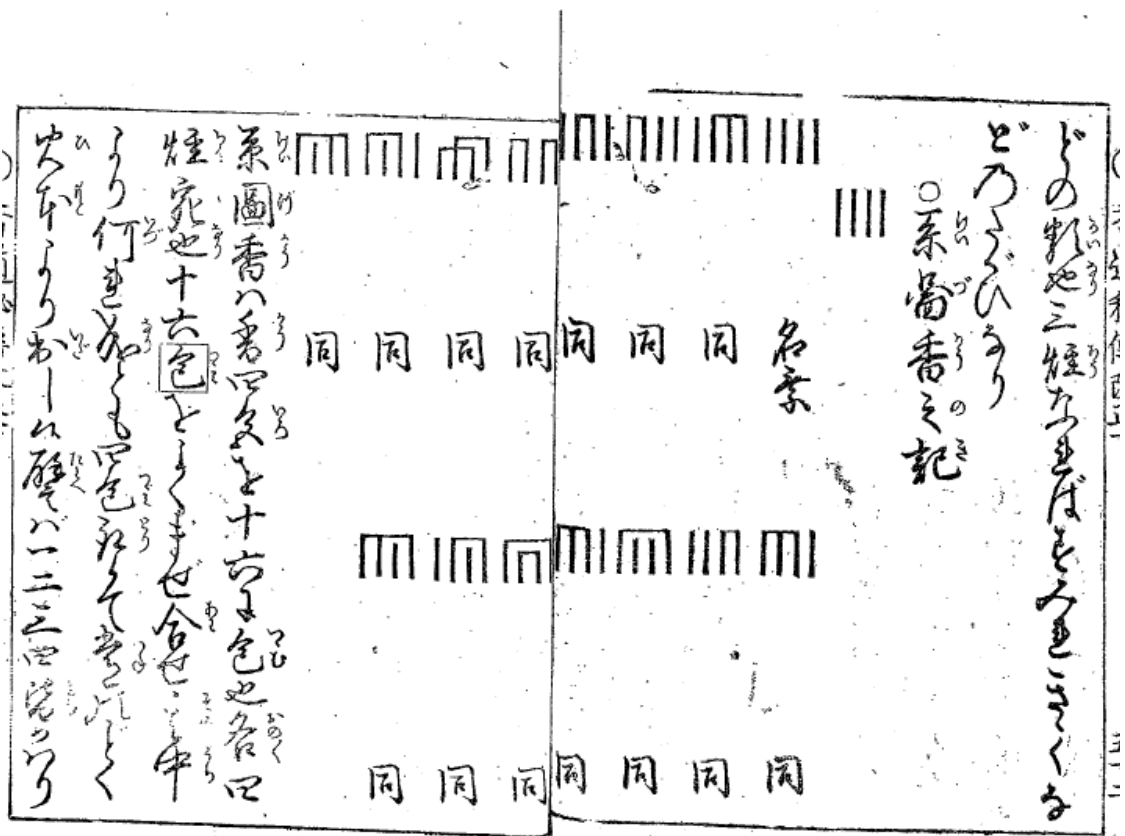
○小草香之記

〇小草香之記
 やうきやう
 ききやう
 うやう
 やう
 うきや
 同 一
 同 一
 合点二
 悉皆合点
 小草香は試あり。草の名の字数程、包
 紙入れ候なり。「ききやう(桔梗)」なれば四包のうち二包
 は同じ香、残り二包は別の香なり。「あさかほ(朝顔)」なれば

四色ながら、別の香なり。「ききやう」なれば、一、
 二の香を「きの香」と名付け、三番目の香
 を「やの香」と名付け、四番目の香を「う」の香と
 名付け候て、試に出し候。試過ぎて、右四色の香
 をませ合わせ、何れなりとも取りて、香炉に置き
 出し申し候。四炷ともに聞き候て、始め二炷つづき
 て、後二炷かわりたると聞き候えば、「ききやう」
 となりとも「ききやう」なりとも書くなり。また、
 はじめ二炷かわりて、後二炷続きたると
 聞き候えば、「やうきき」となりとも、「うやきき」となり
 とも書く。餘は、皆同じ。札紙、何れも記録紙
 に写し、その後、包紙を開き、当りを穿
 鑿（せんさく）して、あたりたる数程、点をかくるなり。草
 の名数、心次第なり。四炷なれば「ききやう」「なで
 し」「あさがほ」など字数の四つ在る物を
 用ゆるなり。五炷なれば「ふじばかま」「しやくやく」な

四色ながら、別の香なり。「ききやう」なれば、一、
 二の香を「きの香」と名付け、三番目の香
 を「やの香」と名付け、四番目の香を「う」の香と
 名付け候て、試に出し候。試過ぎて、右四色の香
 をませ合わせ、何れなりとも取りて、香炉に置き
 出し申し候。四炷ともに聞き候て、始め二炷つづき
 て、後二炷かわりたると聞き候えば、「ききやう」
 となりとも「ききやう」なりとも書くなり。また、

はじめ二炷かわりて、後二炷続きたると
 聞き候えば、「やうきき」となりとも、「うやきき」となり
 とも書く。餘は、皆同じ。札紙、何れも記録紙
 に写し、その後、包紙を開き、当りを穿
 鑿（せんさく）して、あたりたる数程、点をかくるなり。草
 の名数、心次第なり。四炷なれば「ききやう」「なで
 し」「あさがほ」など字数の四つ在る物を
 用ゆるなり。五炷なれば「ふじばかま」「しやくやく」な



どの類なり。三炷なれば「すみれ」「きぎく」な
どのたぐいなり。

○系図香之記

系図香は四色を十六に包むなり。各々四
炷宛なり。十六包をよくまぜ合わせ、その中(うち)
より何れなりとも四包取り候て、常のごとく
火本より出し候。たとえば「一、二、三、四」皆かわり

する間々時ハ札紙ハ「川」や「端」として
 ておとすなり又二同香にて三やうり
 付とやうへ「川」や「端」として「餘」同
 香終りて札紙を開き「誰は何」と図を作り
 書付け、包紙を開き候て、記録紙の端に書
 付けのせ、点をかくるなり。「正傍」の穿鑿（せんさく）むつかし
 き事なり。図にくわしく見えたり。つよき
 当りを「正」とし、弱き当りを「傍」とするなり。
 五炷、六炷、九炷まで在るなり。香は定まり
 て四色に過ぎず。端に「源氏香」と書き付ける時は、
 卷（帖）の名を図の下にも札紙にもするなり。
 ○十炷香焼合之記

一三一 二一
 二 三ウ 二三
 青松 一 二 二 二
 三 三ウ 一 二

四

○十炷香焼合之記

たる聞き候時は、札紙に「川」かくのごとく図を作りて
 出すなり。また、一、二同香にて三、四かわりた
 ると聞き候えば「川」かくのごとく図を作るなり。餘、皆同じ。
 香終りて札紙を開き、「誰は何」と図を作り、
 書付け、包紙を開き候て、記録紙の端に書
 付けのせ、点をかくるなり。「正傍」の穿鑿（せんさく）むつかし
 き事なり。図にくわしく見えたり。つよき
 当りを「正」とし、弱き当りを「傍」とするなり。
 五炷、六炷、九炷まで在るなり。香は定まり
 て四色に過ぎず。端に「源氏香」と書き付ける時は、
 卷（帖）の名を図の下にも札紙にもするなり。

源竹	三一 二一 二二	三
萩花	一三 二一 二二	四
梅花	一三 二一 二二	十
十柱香焼合は常れりて二二三と試を りてて十包とまぜ合せ二色れり 源とは二柱なり(香は香れぬ所 ありてやうと傳ふる)同定め試は ひ合せ二の香とこの時二の札と 二の札と二枚札筒に入れ紙皆同 試の外まじりたるを聞かぬ時一 三より字あれれと添え 源平香之記 一三三一 二二三 二		

十柱香焼合は常のごとく「一、二、三」と試を
いたして、さて、十包をまぜ合わせ、二包取りて、

銀上に二柱ならべ置くなり。香の置き所、灰の
こしらえよう口伝あり。よく聞き定め、試に思
ひ合わせ「一、二の香」と思い候時は、「一」の札と
「二」の札と二枚、札筒に入れ候なり。餘、皆同じ。
試の外まじりたると聞き候時は、「一」か「二」か
「三」かに、「客」の札を添え候なり。

○源平香之記

○源平香之香盤

鳥合香の事。香三色を六包にして三包
 には「もちどり」「よぶごどり」「いなおうせどり」と
 名をあらわして書付け、試に出すなり。三包には
 うちに書いて名をあらわさず。この外、別の香
 二色を二包にして「うの香」と名付け、右の
 三包とひとつにかきませ、五包のうちを
 いずれにても二包取りて、一包宛、火本より
 焼て出すなり。試の香に聞き合わせ、札紙に「これこれ」
 と二つの色を書付けて出すなり。図に委し。
 右の十組の香は、御家の組香の次第なり。
 志野家もこれに随う。今、源平香の盤立物
 之図、初心、意得（ころえ）がたきを以つて、委しく図を改め、
 左に増補し侍る。
 大枝流芳記
 皆享保甲寅年正月

十組香之記考正
 十種香の中「三」の札、古板「二」の札とあるを、
 今、「三」の字にこれを改む。
 「花月香」の記録、古板の書、星・点ともに
 誤り多し。今、これを改む。火本二つ 一本、「二人」に作る。
 「宇治山香」の記録の中、「都のたつみ」の下、
 名乗の二字を脱す。今、これを補う。
 「小鳥香」の記録、古板次第あしく、今、この刻これを改
 正す。また、かづらひは、今「かわらひ」に改む。
 「郭公香」の記録の中、「三」の字の下、「名
 乗」二字脱す。今これを補う。また、「四」の字の下、
 「五 同前」の三字重複するもの一つこれを削る。
 「小草香之記」、聞き人の名、上にあるべし。
 今、ここに断りて、これを補わず。云余、今書く「餘」に
 改む。
 系図香の中、古板の書、記録書きよう

十組香之記考正

「十種香」の中「三」の札、古板「二」の札とあるを、
 今、「三」の字にこれを改む。

「花月香」の記録、古板の書、星・点ともに

誤り多し。今、これを改む。火本二つ 一本、「二人」に作る。

「宇治山香」の記録の中、「都のたつみ」の下、

名乗の二字を脱す。今、これを補う。

「小鳥香」の記録、古板次第あしく、今、この刻これを改

正す。また、かづらひは、今「かわらひ」に改む。

「郭公香」の記録の中、「三」の字の下、「名

乗」二字脱す。今これを補う。また、「四」の字の下、

「五 同前」の三字重複するもの一つこれを削る。

「小草香之記」、聞き人の名、上にあるべし。

今、ここに断りて、これを補わず。云余、今書く「餘」に

改む。

「系図香」の中、古板の書、記録書きよう

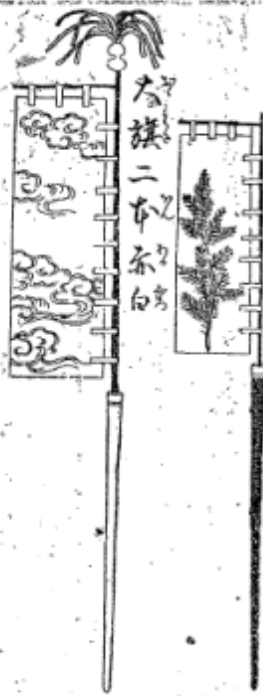
わく今改む
十六以下つみの三字脱す、異本を以て今これを補う。
余皆余字、今改む、解字。
あたりと傍とするなり、今、異本を以て「あたりを
傍とするなり」に改む。
「十・香焼合之記」の中、「青松」の下、四の
字を脱す。今これを補う。
「源平香之記」の中、出香の次に源氏
方二十四点勝、この八字脱す。今、本書
これを補う。また、「萩花」の下、古板三、ウの字一字ずつ
下がる。今、これを改む。
また、「芭蕉」の次に平氏方
十八点負、この七字脱す。今、これを補う。
「源平香盤の図」、本書、古板の通り、そのまま
しるす。今ここに立物、盤の図、初心の見
わけやすからんがため、改めうつし侍る。

あしく、今、これを改む。
十六 この下、つみの三字脱す。異本を以て今これを補う。
余皆、余の字、今「餘」の字に改む。
あたりと傍をするなり、今、異本を以て「あたりを
傍とするなり」に改む。
「十・香焼合之記」の中、「青松」の下、四の
字を脱す。今これを補う。
「源平香之記」の中、出香の次に源氏
方二十四点勝、この八字脱す。今、本書
これを補う。また、「萩花」の下、古板三、ウの字一字ずつ
下がる。今、これを改む。
また、「芭蕉」の次に平氏方
十八点負、この七字脱す。今、これを補う。
「源平香盤の図」、本書、古板の通り、そのまま
しるす。今ここに立物、盤の図、初心の見
わけやすからんがため、改めうつし侍る。

源平香立物之圖

小旗十本 白五本、赤五本

大旗二本 赤白



右の通りに作り、「平家」は赤色、「源氏」は白色、

札の紋と縫はせし縫はすべし。大将旗

は白地、赤字の金襴にて両面合せに作るべし。

旗竿は金物、柄は烏木（こくたん）、紫檀の類をも

ちゆべし。

盤も今は、名所香とかね（兼ね）用ゆるにより、

界（けい）一つの中に穴二つあり。「源平香」のみに

用ゆるは、界一つに穴一つたるべし。勝負の

場は二つたるべし。なお、図のごとし。

源平香立物之図

小旗十本 白五本、赤五本

〔図〕

大旗二本 赤白

〔図〕

右の通りに作り、「平家」は赤色、「源氏」は白色、

札の紋を絵に書き、または縫にすべし。大将旗

は白地、赤字の金襴にて両面合せに作るべし。

旗竿は金物、柄は烏木（こくたん）、紫檀の類をも

ちゆべし。

盤も今は、名所香とかね（兼ね）用ゆるにより、

界（けい）一つの中に穴二つあり。「源平香」のみに

用ゆるは、界一つに穴一つたるべし。勝負の

場は二つたるべし。なお、図のごとし。

源平香盤之圖

盤一尺二寸五分、横九寸、足見合わせ、分取り一寸五分

○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○

鳥合香之記録の聞き、鳥の名の上に連中の名を書くべし。本書これを脱すと云えども、今ここに断りて補わず。右十組香の事、委しくは「奥の葉」に弁ず。合わせ考うべし。

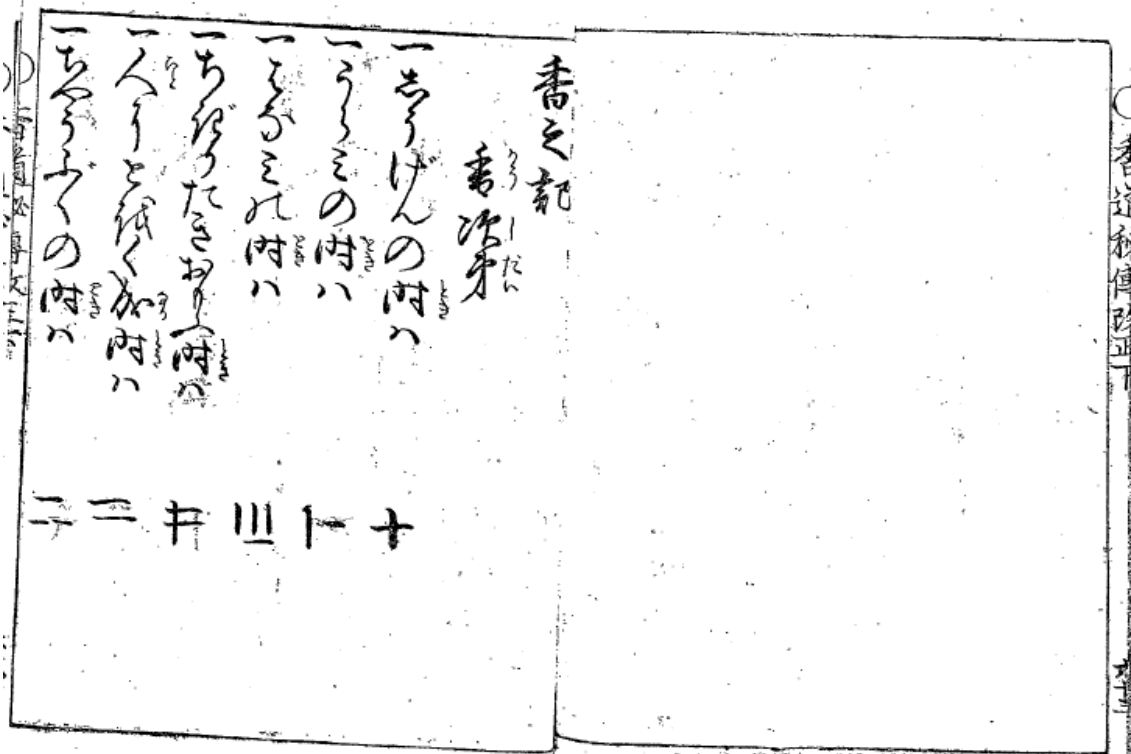
大枝流芳考正

源平香盤之図

縦五行、横十目、中に「分取場（ぶんどりば）」あり。縦一尺二寸五分、横九寸、足見合わせ、分取り一寸五分

鳥合香之記録の聞き、鳥の名の上に連中の名を書くべし。本書これを脱すと云えども、今ここに断りて補わず。右十組香の事、委しくは「奥の葉」に弁ず。合わせ考うべし。

大枝流芳考正



香之記

香次第

一 ちゅうげんの時
 一 うらみの時
 一 はなみの時
 一 ちぎり(契り)の時
 一 人にとおくなる時
 一 ちやうぶく(調伏)の時

二二 十 三 十

香之記

香次第

一 しゅうげん(祝言)の時
 一 うらみ(恨み)の時
 一 はなみ(花見)の時
 一 ちぎり(契り)の時
 一 人にとおくなる時
 一 ちやうぶく(調伏)の時

二二 十 三 十

一よろこびの時
 一うき(憂い)の時
 一人を待ちかねたると思ふ時
 一思へどもならずして、こころばかりかよう時は
 一灰のをし(押)様の事
 一春は 一夏は 二
 一秋は 一冬は 井
 一志野殿は、鳥の羽にて香爐ははく(掃く)事な

一よろこび(喜び)の時は
 一うれい(憂い)の時は
 一人を待ちかねたると思ふ時は
 一思へどもならずして、こころばかりかよう時は
 一灰のをし(押)様の事
 一春は 一夏は 二
 一秋は 一冬は 井
 一志野殿は、鳥の羽にて香爐ははく(掃く)事な

一 小指にての（拭う）なり。
 一 先ず、香爐に火を入れ、灰をかきたて、「せがい」より
 少したかくして、能くなり（形）をなおし、香箸
 のかたがたは、下に置き、一つを筆とることく
 持ちて、なりを能くなおし、香爐は順にめぐ
 る様になりをなおし候なり。さて、小指にて拭い、また、
 香箸を筆とることくに持ち、間香爐は
 五合におすなり。麁相（そそう）なる灰は、箸二つずつ、三方
 へ合（あ）はせ、地床（じど）ある所へ著（つ）け、二（に）三（さん）方
 へ（を）付（つ）け、地床（じど）野殿（のの）へ著（つ）けて、中（な）に穴（あな）を明け
 て、口（く）ばかりを（さ）さき、銀（ぎん）をしかれ候。また、穴（あな）を明けず
 にもよし。さて、灰（はい）をおし始（は）むる時は、先（ま）ず置き前
 の足をひとさし指（ゆび）の先（せん）のそばには（外（ほか））るる
 様（よう）にもち、そのめぐらすは、左（ひだり）の手（て）ばかりにて、
 「そろそろ」とめぐらすなり。
 一 置き前の事、香爐（かうろ）の紋（もん）など（を）在（あ）る方（かた）、また（は）、う
 つくしき方（かた）を用（もち）ゆるなり。

一 小指にての（拭う）なり。
 一 先ず、香爐に火を入れ、灰をかきたて、「せがい」より
 少したかくして、能くなり（形）をなおし、香箸
 のかたがたは、下に置き、一つを筆とることく
 持ちて、なりを能くなおし、香爐は順にめぐ
 る様になりをなおし候なり。さて、小指にて拭い、また、
 香箸を筆とることくに持ち、間香爐は
 五合におすなり。麁相（そそう）なる灰は、箸二つずつ、三方

[illegible]

一人に渡し候時は、置き前を人さし指の先のそ

一火どりにて香かう聞くことはなし。もし、きかば、ふ
 せせうこう（伏籠）火屋（火屋）のけ（退）べし。
 一名物の香かう爐ろならば、木の箸しほにて灰を
 おおすすこともあり。香かう爐ろにきずつけまじ
 きためなり。
 一香を聞くに左の指三つは、香かう爐ろの底に
 有るごとく、人さし指一つ、わきにはずるる様
 に持つなり。
 一空焼くわきの香の大きさ扇の骨の大きさなり。
 一夏は香は、きかれぬなり。雨の朝、雪の夕べなど
 には必ず聞くべし。夏は香のき（氣）ちがうなり。
 一香かう爐ろの灰をおすは、香を灰の上におとし
 てもとらんと云うことなり。灰おさねば、灰の
 中に香入りて見えぬなり。
 一常の香かう爐ろは、灰を少しすくなくするぞ。
 一香をつぎてあぐるは、指を少しぬらして取るなり。

一名香包む紙唐紙よし。鳥の子に包めば、
 ちいさき香はとふ事あり。
 一香袋は、底を指し渡し一寸八分の丸底
 にするなり。三色につぎたるがよきなり。緒さがり
 常のごとし。袋の高さは、底に相応仕る様
 にするなり。
 一香爐の火、始めはそときつく取りて、真那斑
 などのわろき香を聞きて、火あいよくなり
 たりすなり也。
 一香爐の火、始めはそときつく取りて、真那斑
 などのわろき香を聞きて、火あいよくなり
 たりすなり也。
 一火あいは、銀を置いて、銀の上に指をあて、
 そとおけば、あつくて指をひく程なる
 が吉(よし)。それも指をあて、そのままひかるる程
 のはきつし。香をつがぬ先に聞きて、顔に「ほん
 のり」と火氣のあたる程なるがよし。
 一新しき香は、つげば、やがて「はなばな」として

火末うもる也是ハ新き香と悪しき香也
 一よき香ハ初・中・後とも同じ聞きなり
 一「八重菊」を「すみれ」と聞きてもよしと隆
 勝申されしなり
 一返しのある香は、伽羅ばかりなり。十種の外
 などは伽羅にてもかえしなし
 一「中川」、伽羅にありと云う。真那斑、本なり
 一香、はじめつぐ時、まなばんをつぎてよし
 一返しのあつ香ハ伽羅汁也十種の外
 中川伽羅もよくまなばん也
 一香、はじめつぐ時、まなばんをつぎてよし
 一あつかなどの類つぐ事なし。香聞くべき時
 は、灰を尖(するど)にするなり。香焼く時は、少し「ろく(陸)」に
 するなり
 一真那賀は、聞きの早くうする(薄)が上々なり
 一きわだ(薬)、焼粉にして、たらの木の中の白み
 を去り、やき(焼)、二種を等分に合わせ粉にして置き、
 香爐に入れ、火をつくるなり
 一香爐の灰に池のひし(菱)のつると葉を干して

焼く用ひ火久しく用ゆる也
 一香爐の灰に大豆を焼く、また、いり(煎り)じよう(尉)
 用ひて用ゆる
 一香爐の火に、たらの木を四つにわりて
 白みを去り、あく(灰汁)にて煮て、鉄砲の薬の炭
 のごとく焼き粉にして用ゆと云う。
 一かざりに香爐、香合置く時は、香ばし(筋)は、
 きようじ、こじ立てにかざるなり。
 一盆に香爐、香合を置く。香筋は、さき(先)を
 香爐、香箱の間へ向く(向)ごとくに置く。また、二つの間
 にすぐ(真直)に置くという事あり。焼きて後は、
 左の方より香爐、香箱の間へ置く。また、始めは、
 香筋は手に持つて出るもよしという。

右の筆記、誰人の作たることを知らず。終わりに姓名を記せず。書中、また不審の事多し。古板の本、下巻の始めに入るといへども、今、下巻の終わりにうつす。委しくは凡例に考えをそのふ。

享保甲寅年正月

大枝流芳記

香之記考正

此記、誰人の作と云ふと別して初めの「香次第」と云ふ疑論。凡例及び附録に委し。

真那斑は「は」の字の下「は」字脱す。本書これを補う。

口糾補

口糾は「誘」なりと字書にありて、「みちびく」と訓ず。恐らくは「斗」の字ならんか。みちびくにては文義通ぜず。これに依つて本書、これを改む。

びくにては文義通ぜず。これに依つて本書、これを改む。

右の筆記、誰人の作たることを知らず。終わりに姓名を記せず。書中、また不審の事多し。古板の本、下巻の始めに入るといへども、今、下巻の終わりにうつす。委しくは凡例に考えをそのふ。

享保甲寅年正月

大枝流芳記

香之記考正

この記、誰人の作をしらず、別して初めの「香次第」という事、疑論すべし。凡例及び附録に委し。

真那斑は「は」の字の下「は」字脱す。本書これを補う。

口糾は「誘」なりと字書にありて、「みちびく」と訓ず。恐らくは「斗」の字ならんか。みちびくにては文義通ぜず。これに依つて本書、これを改む。

びくにては文義通ぜず。これに依つて本書、これを改む。

艮と今、異本改銀
 香炉の文 今、異本改銀
 方紙を改む 今、異本改銀
 書依改む 今、異本改銀
 小刀にて改む 一本へぐに依り今、異本改銀
 一太子などの様なる火よわき香は、そと
 大よわきや伽羅などの火よわき香は、ち
 いさくさくや小刀にて改む 今、異本改銀
 考合は大同小異あり尤も古板のもの文
 章通じがたし今、異本改銀
 とり今、異本改銀
 と改む 今、異本改銀
 一火あいは良 良字を改銀字
 初、中、後とも同じ聞きなり 今、異本改銀
 一火あいは良 良字を改銀字

（）に付道必事文三二

三二

艮を 今、異本を以つて「銀」に改む。

香炉の文 異本を以つて、今、本書「紋」の字に改む。

方紙を改む 今、異本「する」一本、「用ゆる」に作る。今、本書これによつて改め正す。

小刀にてつくなり 一本「へぐ」に作る。今、本書これを改む。

一 太子などの様なる火よわき香は、そと

大きにわるなり。伽羅などの火よわき香は、ち

いさくさくなり。小刀にて

考え合はするに、大同小異あり。尤も、古板のもの、文章通じがたし。今、本書、異本に依つて改正

す。見合はすべし。今、ここに古板の文章を

を改むして、その改めし趣をしらしむ。

一 火あいは良 「良」の字、本書「銀」の字に改む。

初、中、後とも同じ聞きなり 今、異本に一本に

「しかし火末はあるべし」と云う事あり。今、ここ

又著て不書よは不補
 多どん事 一本、たどんの事並びに灰の
 事とあり、今、これに随い、本書、これを補う。
 四つわりて 四つの下に「に」の字脱す。本書、今
 これを補う。
 補う 異本に「きよう
 きよう」に置きなり
 じ、こじ立てにかざるなり」に作る。今、これに依つて、
 本書改正す。
 間へ川 この「川」の字、異本、「向」の字に作る。
 今、文章通ぜざるにより、これを以つて「向」の字に本
 書をあらたむ。
 香之記考正終り
 大枝流芳校正

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

【参考資料】

『香道秘伝書・米川常白香道秘伝抄』

香書に親しむ会発行 清水書院 平成十七年十月刊

令和二年八月

『香筵雅遊』 國井和裕